

埼玉県戸田市遺跡調査会報告書 第5集

みなみ はら
南 原 遺 跡 VI

1996

戸田市遺跡調査会

はじめに

戸田市遺跡調査会会長 奥 墨 修 一

戸田市は埼京線開通以来、マンションの建設等宅地開発が急速に進み、街の形態が大きく変貌してまいりました。

本書は、このような都市開発の中で失われていく本市の埋蔵文化財の保護を目的として緊急発掘された「南原遺跡」の貴重な記録です。

南原遺跡は、荒川の氾濫によって形成された自然堤防の南端にあり、鍛冶谷、新田口遺跡とともに戸田市を代表する遺跡の一つです。昭和44年に初めて発掘をしてから今回の発掘で第6次になります。第2次調査の地点では、古墳跡から人物埴輪（頭部）も出土し、荒川下流域にあっては貴重な遺跡の一つになっています。

今回の調査は第6次を数え、集落の南部分の一部ではありますが、古墳時代前期の住居跡や古墳、また中世の堀などが沢山検出され、多くの成果を上げることができました。

本書を埋蔵文化財の保護と普及活用の資料として、また学術研究の基礎資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、本発掘調査に多大なご理解とご協力を賜りました株式会社寺田倉庫及び直接発掘調査に参加いただきました戸田市遺跡調査協力会の皆様に深く感謝申し上げます、あいさつといたします。

例 言

- 1 本書は、埼玉県戸田市南町2,333番地(5番22号)の倉庫建設工事に伴って発掘調査された南原遺跡第6次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業及び整理事業は、倉庫建設の事業者である寺田倉庫株式会社(東京都品川区東品川二丁目6番10号)から、戸田市遺跡調査会が委託を受けて実施したものである。
- 3 発掘調査は、平成4年6月25日から8月24日にわたって行った。
- 4 発掘調査は別表に掲げた調査組織により実施した。
発掘担当者 小島 清一 (戸田市教育委員会 生涯学習課)
- 5 出土品の整理及び図版の作成は、発掘担当者の指導により、整理参加者全員で行った。
- 6 本書の作成にあたり、執筆、写真撮影、編集は小島が行い、渡辺豊子、尾形美枝子の協力を得た。遺構図版及び基本土層図は渡辺、尾形が作成した。
- 7 発掘調査から報告書を作成するまでの過程で、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して謝意を表します。(敬称略)

浅野 晴 樹 伊藤 和 彦 尾形 則 敏 金箱 文 夫 中島 宏
根本 靖 伴 瀬 宗 一 福田 聖 大 和 修
戸田市立戸田中学校 戸田市立郷土博物館 戸田市消防本部 戸田市遺跡調査協会

- 8 発掘調査及び整理参加者は、下記のとおりである。

在 原 和 佳 子	五十嵐 紀志子	五十嵐 智 啓	上 原 勇	榎 本 真由美
岡 崎 久 子	尾 形 美枝子	開 米 千恵子	嘉 規 小夜子	加 藤 淳 一
喜多村 悠	桑 原 裕 子	小 林 邦 子	小 山 喜代子	早乙女 幸 子
渋谷 英 晴	島 田 文 子	鈴 木 カエ	佐 藤 啓 子	鈴 木 よし子
関 徳太郎	左 座 けい子	高 崎 奈々	高 橋 富士子	根 本 真
林 佐江子	広 瀬 幸 子	古 川 順 弘	真 藤 英 子	渡 辺 豊 子

目 次

はじめに

戸田市遺跡調査会会長

奥 墨 修 一

例 言

凡 例

1	発掘調査に至るまでの経過	1
2	発掘調査の経過	2
3	南原遺跡の立地と環境	3
4	南原遺跡の概観	5
5	遺構と出土遺物	9
(1)	住居跡と出土遺物	9
(2)	周溝墓と出土遺物	29
(3)	溝と出土遺物	39
(4)	堀と出土遺物	39
(5)	その他の遺構と出土遺物	41
(6)	グリッド出土の遺物	42
6	ま と め	45

挿 図 目 次

第1図	南原遺跡Ⅵ及び周辺の遺跡位置図	3
第2図	南原遺跡調査地位置図	5
第3図	基本土層図	6
第4図	南原遺跡Ⅵ遺構配置図	7
第5図	第1号住居跡実測図及び遺物出土位置図	9
第6図	第1号住居跡出土遺物実測図	10
第7図	第2号住居跡実測図及び遺物出土位置図	11
第8図	第2号住居跡出土遺物実測図	12
第9図	第3・4号住居跡実測図	15
第10図	第3・4号住居跡遺物出土位置図	17
第11図	第3・4号住居跡出土遺物実測図	17
第12図	第5号住居跡実測図及び遺物出土位置図	18
第13図	第5号住居跡出土遺物実測図	19
第14図	第6号住居跡実測図	22
第15図	第6号住居跡遺物出土位置図	23
第16図	第6号住居跡出土遺物実測図	23
第17図	第7・8号住居跡実測図	24
第18図	第7号住居跡出土遺物実測図	25
第19図	第7・8号住居跡遺物出土位置図	26
第20図	第8号住居跡出土遺物実測図	27
第21図	第1号方形周溝墓実測図	29
第22図	第1号方形周溝墓出土遺物実測図	30
第23図	第1号円形周溝墓土層断面図	32
第24図	第1号円形周溝墓実測図及び遺物出土位置図	33
第25図	第1号円形周溝墓出土遺物実測図	35
第26図	第1号溝並びに第1・2号堀実測図	38
第27図	第1号溝出土遺物実測図	39
第28図	第1号堀出土遺物実測図	40
第29図	ビット実測図	41
第30図	グリッド出土の遺物実測図	42
第31図	住居跡比較図	46

表 目 次

第1表	第1号住居跡出土遺物	10
第2表	第2号住居跡出土遺物(1)	13
第3表	第2号住居跡出土遺物(2)	14
第4表	第3・4号住居跡出土遺物	16
第5表	第5号住居跡出土遺物(1)	20
第6表	第5号住居跡出土遺物(2)	21
第7表	第6号住居跡出土遺物	23
第8表	第7号住居跡出土遺物	25
第9表	第8号住居跡出土遺物	28
第10表	第1号方形周溝墓出土遺物	31
第11表	第1号円形周溝墓出土遺物(1)	36
第12表	第1号円形周溝墓出土遺物(2)	37
第13表	第1号溝出土遺物	39
第14表	第1号堀出土遺物	40
第15表	ビット一覧表	41
第16表	グリッド出土の遺物(1)	43
第17表	グリッド出土の遺物(2)	44

図 版 目 次

<p>図版1 南原遺跡Ⅵの位置(1) 調査区域全景(2)</p> <p>図版2 第1号住居跡(西から)(1) 第2号住居跡(北から)(2)</p> <p>図版3 第2号住居跡土器出土状態(1)~(3) 第3号住居跡土器出土状態(4) 第3号住居跡(西から)(5)</p> <p>図版4 第4号住居跡(南から)(1) 第5号住居跡(北から)(2)</p> <p>図版5 第6号住居跡(北から)(1) 第7・8号住居跡(西から)(2)</p> <p>図版6 第1号方形周溝墓(上空から)(1) 第1号方形周溝墓土層断面(2)</p>	<p>図版7 第1号円形周溝墓(上空から・東側・南側)(1)(2)(3) 第1号円形周溝墓土器出土状態(4)(5)</p> <p>図版8 第1号溝(南から)(1) 第1・2号堀(南から)(2)</p> <p>図版9 第1~4・6~9号ビット(1)~(8)</p> <p>図版10 第2号住居跡出土遺物(1)~(6)</p> <p>図版11 第3号住居跡出土遺物(1) 第5号住居跡出土遺物(2)(3) 第8号住居跡出土遺物(4) 出土した土鍾(5) 出土した石器(6) 第1号方形周溝墓出土遺物(7)</p> <p>図版12 第1号円形周溝墓出土遺物(1)~(4) グリッド出土の遺物(5)(6)</p>
--	--

発掘調査の組織

会 長	戸田市教育委員会教育長	奥 墨 修 一
理 (会長代理)	戸田市教育委員会教育次長	石 山 勝 成
理 事	戸田市文化財保護委員会委員	金 子 弘
"	"	萩 原 勝 明
"	戸田市開発部都市計画課課長	熊 谷 清 志
"	戸田市開発部まちづくり推進課課長	家 崎 匡
"	戸田市建設部建築課課長	杉 浦 剛 男
"	戸田市教育委員会生涯学習課課長	石 井 勝 則
監 事	戸田市社会教育委員会委員長	春 山 嘉 臣
"	戸田市立郷土博物館館長	伊 藤 和 彦
事務局 長	戸田市教育委員会生涯学習課課長	石 井 勝 則
事務局 員	" 専 門 員	和 田 卓
"	" 主 任	宮 崎 敏 志 子
調 査 員	" 学 芸 員	小 島 清 一

凡 例

- 本書に掲載した挿図の縮尺は、原則として遺構図1/80・1/40、遺物実測図1/4である。
それ以外は、図に添えたスケールを参照されたい。

- 遺構・遺物図中の焼土、炭化物等の標示は次のとおりである。



- 土器観察表における胎土の記号は、下記のとおりである。
A：石英、B：金雲母、C：斜長石、D：黒く光る石、E：赤色粒子、F：白色粒子
G：褐色粒子、H：砂粒子
- 土層中の水糸レベルは、すべて標高2.2mである。

1 発掘調査に至るまでの経過

平成2年6月22日、東京都品川区東品川二丁目6番10号の寺田倉庫株式会社から、戸田市南町233番地（5番22号）に倉庫建設の開発行為に伴う協議の事前相談がなされた。この地には既に倉庫が建設されており、建て替えを計画するものであった。

戸田市では、昭和60年の埼京線の開通により、共同住宅をはじめ事務所建設等の開発が進み、文化財の保護が急務となっている。このような状況において、戸田市教育委員会では、開発担当所管課と各種の協議を重ね、文化財保護と開発事業との調整を図っている。

南原遺跡は、昭和44年に初めて調査が行われて以来、古墳時代の集落跡や古墳跡が所在することが明らかになっている。

事前の相談により、教育委員会では当該地が南原遺跡の包蔵地に位置するため、開発を行う際には遺跡の現状を確認するため、試掘調査を実施する旨の回答をした。

その後、事業の計画にあたり数度にわたる協議を重ねた。事業の計画が固まり開発に伴う事前協議がなされたのは、平成4年5月26日である。教育委員会では、試掘調査を実施する旨通知し、平成4年6月9日に埼玉県教育委員会の協力を得て、試掘調査を実施した。結果、古墳時代の住居跡や溝跡等の遺構や遺物が検出された。そこで、当該地には埋蔵文化財が所在する旨通知し、その取り扱いについて教育委員会と事業者で再び協議を行った。現地における遺跡の保存については、計画を変更することが困難であることから、事前に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

これをもって、事業者からは平成4年6月23日付で、文化財保護法第57条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘届が文化庁長官あて提出された。発掘調査に際し、教育委員会と事業者で協議し、事業が緊急を要することを考慮し、戸田市遺跡調査会会長と事業者は平成4年6月23日に事業委託契約を締結した。発掘調査は、平成4年6月24日から開始することとなった。

戸田市遺跡調査会からは、文化財保護法第57条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官あてに提出された。

なお、文化庁長官からは、平成4年11月12日付、委保第5の1047号をもって発掘届を受理した旨通知があった。

2 発掘調査の経過 一日誌抄

南原遺跡第6次調査は、平成4年6月24日から8月24日までの2カ月間で実施した。季節が、梅雨から夏にかけての時期であり雨天を考慮に入れた計画を立てたが、思いのほか雨の日数が少なかった。夏の猛暑の中、予定期間内に調査を終了するできたことは参加者の熱意によるところが大きい。

以下、調査経過が5期に区分できるので整理しながら経過を見ていきたい。

(6月24日～7月1日)

初日の6月24日は、雨のため中止となってしまうが調査機材の搬入を行い、関係者が集まり調査が速やかに運ぶよう調査方針を再確認する。25日は、早朝より東南隅から重機で表土を掘削する。このときに、初日から住居跡2軒が姿をあらわしている。その後、遺構が濃密に分布している状況把握され、慎重に掘削を進めていった。表土の掘削は、残土の搬出の作業もあり7月1日までの実質6日間を要している。

(7月3日～7月10日)

表土が除去され、遺構確認作業に移行する。北側から南に向かって遺構確認面である黄褐色粘土層の精査を丹念に行った。この段階で明らかになった遺構は、住居跡8軒、方形周溝基1基であり、他に溝や堀が確認されている。住居跡は、掘り方が浅かったことや、火を受けたものが多く表面から焼土や炭化物が露出しているような状況であった。なお、このときに事業者から雨天の際の作業用として、建設作業に用いるドームを取り付けていただいた。

基準点測量及びグリッドの設定は7月3・4日に行った。

(7月13日～8月18日)

確認された各遺構の調査を開始する。第1号住居跡から取りかかり、第2号住居跡等、住居跡から掘り始めた。遺物の取り上げについては、分布図をつくり、火を受けた住居については焼土や炭化物の広がりを実測図に記載した。雨天の日については、ドームの中で作業を行った。

(8月19日～8月20日)

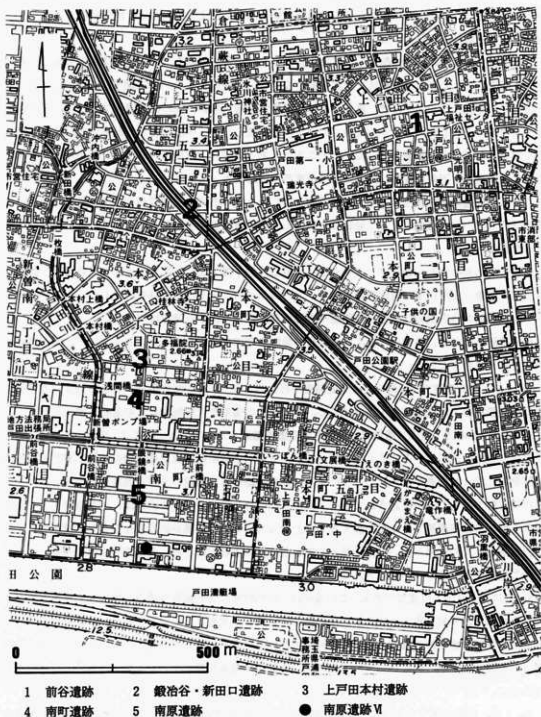
調査区域内における遺構の全容を明らかにするため、前日から全員で清掃作業を行い、8月20日に全体の写真撮影を行った。なお、写真撮影については、戸田市消防本部の協力を得、「散水車」「はしご車」を動員していただき、調査区の上空35mから撮影を行った。

(8月24日)

検出された遺構の全体測量を行う。この日、予定された全作業を終了、約2カ月を過ぎたプレハブ内の資材を撤収し、現地における全ての作業を終了した。

調査日数51日、参加延べ人数494名であった。

3 南原遺跡の立地と環境



第1図 南原遺跡Ⅵ及び周辺の遺跡位置図

南原遺跡Ⅵ(第6次調査)の調査地は、戸田市南町2,333番地(5番22号)に所在する。南原遺跡は、第1次から第5次調査まで進んでおり、今回調査したところは遺跡の中心地に近い地点である。この地域は、昭和30年代頃からの区画整理事業とともに早くから倉庫の建設が進んでおり工業地域として位置付けられている。

戸田市は、埼玉県の南端に位置し、東は川口市、北は浦和・蕨両市、西から南は荒川を境とし朝霞・和光両市、そして東京都板橋区・北区と接している。面積は、18.17㎢を測る。東には中山道(国道17号線)が、中央には、東北・上越新幹線及び埼京線が、西には国道17号バイパスが縦断し、東京都へと通じている。かつて荒川には「戸田の渡し」や「早瀬の渡し」があって、江戸への北の玄関口として交通の要衝となっていたところでもある。現在、荒川は西部では北西から南東へ流れ、笹目付近で東へと方向を変え、南部ではほぼ東西に流路をとっている。

こうした周辺地域の状況の下で、南原遺跡をはじめとする市内の遺跡群が分布する低平な微高地は、荒川(旧入間川)の溢流によって形成された火山灰質の黄褐色粘土層を基盤としている。標高は4～5mを測る。

戸田市内における主な遺跡は、市中央部に位置しており第1図にも記したとおり前谷遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、上戸田本村遺跡等が連なり、上戸田川に沿うように遺跡群を形成している。いずれも弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡や方形周溝墓等を検出する集落跡である。

南原遺跡はNo.5で、葛蒲川を境にして自然堤防の南端に位置するものである。以下、周辺遺跡の説明を加えておきたい。

No.1は、前谷遺跡で、昭和47年に発掘調査が行われており、弥生時代後期の弥生町期及び古墳時代前期の五領期の方形周溝墓各1基をはじめ、平安時代の遺構や灰釉陶器などの遺物も検出されている。

No.2は、鍛冶谷・新田口遺跡で、埼玉県選定重要遺跡となっている。現在は、宅地化が進み、遺跡の範囲や立地状況がつかみにくなっているが、東北・上越新幹線及び埼京線の付設工事や共同住宅の開発等に伴って調査が行われたことにより、弥生町期から五領期の方形周溝墓群を主体とした大規模な集落跡であることが確認されている。現在までに行われた調査の成果は、主な遺構として住居跡39軒、方形周溝墓104基を数えるものとなっている。各遺構が折り重なるように構築されており、基城としての性格が強い。出土品としても各時期の土器をはじめ、勾玉や管玉等の玉類、はしごや斧の柄等の木製品等々が検出されている。

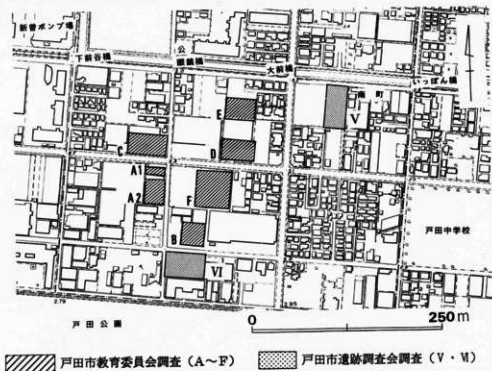
No.3は、上戸田本村遺跡である。この遺跡は、昭和53年に市史編纂事業の一環として発掘調査が実施されており、平成6年と平成7年には開発に伴い調査が実施されている。結果、前野町期の溝、五領期や古墳時代後期の鬼高期の住居跡等が検出されている。なお、市内唯一残存(ただし、墳丘は開墾され原形をとどめていない。)の「くまん塚」古墳が隣接地に所在し、そこからは直刀二振が出土している。

No.4は、南町遺跡である。この遺跡は昭和61年に共同住宅の開発に伴う事前調査として発掘調査されたもので、五領期の大型1基を含む2基の方形周溝墓が検出されている。

4 南原遺跡の概観

南原遺跡は、荒川（旧入間川）の溢流によって形成された自然堤防の南端に立地している。現在までに6次にわたる調査が実施され、古墳時代時代前期の集落跡をはじめとする遺構の存在が明らかになっている。とくに、古墳時代後期の古墳跡は荒川左岸流域にあっては最南端の古墳群として位置付けられ、さらに類例の増加が待たれているところである。

南原遺跡が位置する戸田市南町は、早くから区画整理事業が行われ、現在では住宅や倉庫が整然と立ち並んでいる。標高は約5.0mを測り、平坦な本市にあっては比較的起伏の見られるところで古くから「高知原（たかちばら）」と呼ばれており、土器の散布地として知られていた。このような地において、遺跡の規模は東西約250m、南北約200mを測り、面積にして約50,000㎡とする大きな規模の集落跡であることが分かってきている。



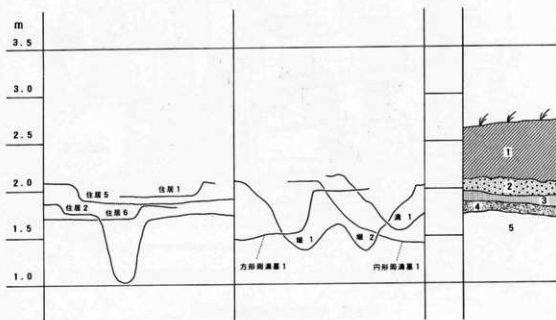
第2図 南原遺跡調査地位置図

初めての発掘調査は昭和44年に遡ることができる。昭和42年の敷谷・新田口遺跡の発見以降、遺跡の所在に目が向けられ、この南原遺跡もその対象に含められている。発掘調査の実施にあたっては、第2図に記したとおりであるが調査区域をA~Fの6地区に分けて行っている。第1次から第4次調査までは保存対策事業として着手され、その後は共同住宅等の開発に伴い第5・6次調査を重ねて現在にいたっている。今までに検出された主な遺構をまとめると次のようである。

古墳時代前期前半 (五領期)	住居跡	23軒 (A地区4・第5次11・第6次8)
古墳時代前期前半 (五領期)	方形周溝墓	9基 (A地区5・B地区1・D地区1・第5次1 第6次1)
古墳時代前期後半 (和泉期)	住居跡	3軒 (B地区3)
古墳時代後期前半 (鬼高Ⅰ期)	円形周溝墓	4基 (A地区1・F地区2・第6次1)
古墳時代後期後半 (鬼高Ⅱ期)	住居跡	1軒 (D地区1)
古墳時代後期後半 (6世紀後半)	古墳跡	1基 (A地区1)
平安時代前半 (10世紀)	掘立柱建物遺構等	(ABCDEF地区)
中世 (14世紀～15世紀)	掘跡	5本 (第5次3・第6次2)

以上のように、南原の地は集落跡、あるいは墓域として4世紀頃から開け、人々の生活が営まれてきたことが窺われる。

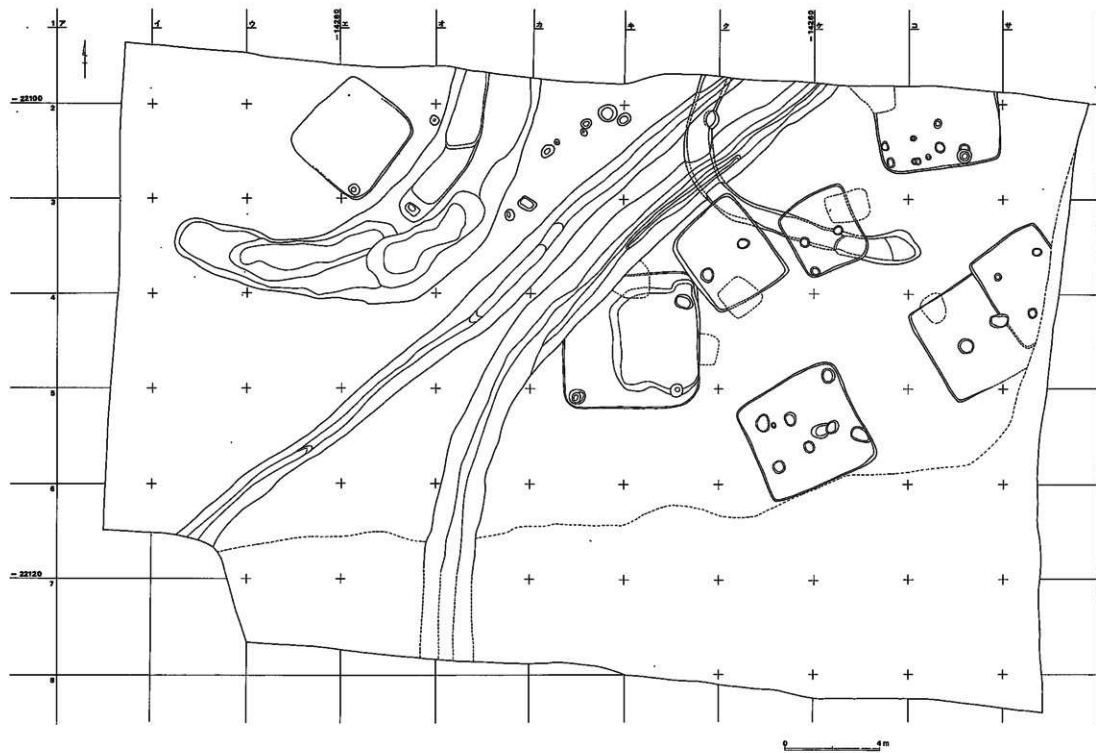
また、本遺跡のA2地区の第3号住居跡からは甌形の長頸壺形土器が出土しており、伊勢湾沿岸地域で盛行していた「欠山式土器」の検出も見逃せないところである。



土層註

1. 盛土 (1) コンクリートガラ等を多量に含む盛土。
2. 盛土 (2) 黄褐色土 (ローム) を厚く堆積させる。
3. 明灰褐色土 黄褐色土粒子を多量、白色粘土粒子を一様に多量含む。粘性、弱。しまり、良。
4. 暗灰褐色土 含まれるものは第3層と同じであるが、色調としてやや暗くなる。粘性、良。しまり、良。
5. 黄褐色土 粘土質土層。基盤の層。粘性、強。しまり、強。

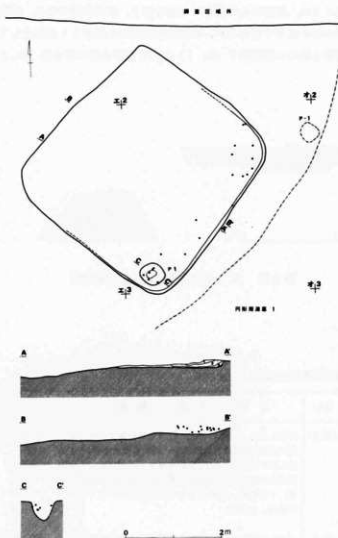
第3図 基本土層図



第4図 南原遺跡V遺構配置図

5 遺構と出土遺物

(1) 住居跡と出土遺物



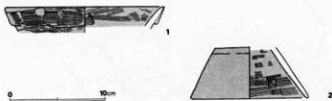
土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を一様に多量、白色粒子を一様に少量含む。粘性、良。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子を一様に多量、焼土粒子やブロックを多量含む。粘性、良。しまり、良。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒子やブロックを多量。粘性、強。しまり、良。

第5図 第1号住居跡実測図及び遺物出土位置図

第1号住居跡（第5図）

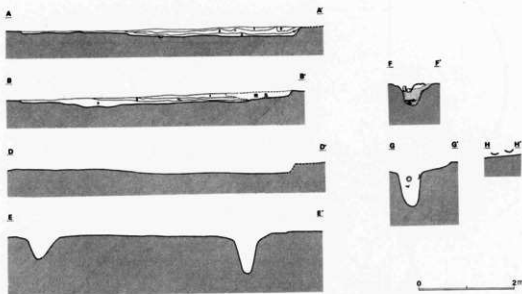
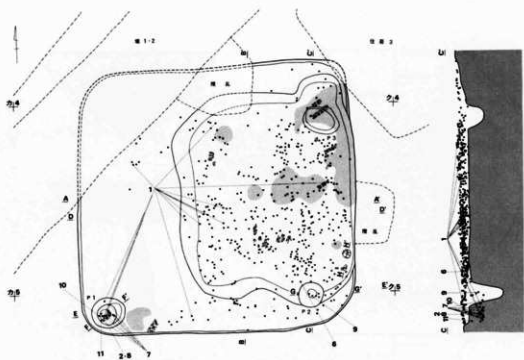
調査区の西北側ウ〜エー1〜2グリッドに位置する。第1号円形周溝墓の周溝内側にあたり、本跡の方が古い。また、住居の西側半分を、上層から削り取られている。規模は、東西方向が推定となるが、長径4.2m、短径4.0m、面積を約16.8㎡を測り、隅が僅かに丸くなる隅丸方形プランを呈する。床面は、遺構確認面から16.0cmほどの深さで、ほぼ平坦な掘り込みである。炉跡は、上層からの影響を受けているのだろうか、検出されなかった。ピットは、一箇所で南コーナーに検出している。長径46cm、短径44cm、床面からの深さ78cmを測り、ほぼ円形である。遺物は少なく、コーナー付近とピットの中から小破片ではあるが、古墳時代前期の土器が25点出土している。ピット内からは、図示し得た壺形土器の口縁部破片（No.1）と台付甕形土器の脚台部（No.2）が出土している。



第6図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1表 第1号住居跡出土遺物（第6図）

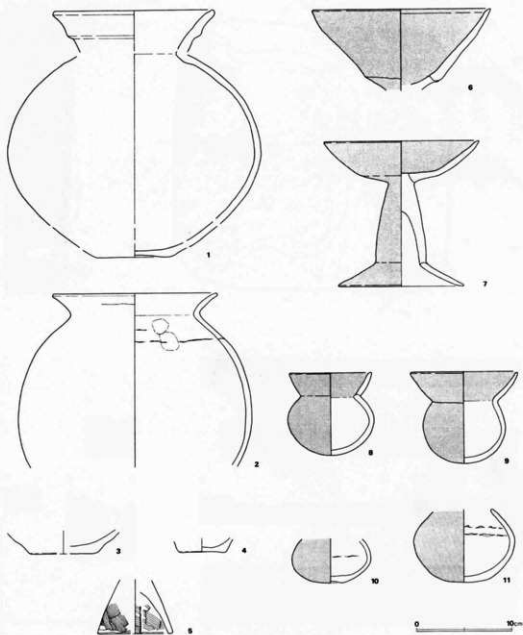
番号	器種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	広口壺	口径 16.8	外傾し立ち上がる口縁部、複合口縁を呈す。外面は、複合部は横方向の細かい刷毛整形を施す。約2.0cmで一旦止めて、連続させる。下部にも、斜方向の刷毛目。内面は、横方向に刷毛目を残す。ナゲ調整。内外面ともに赤彩痕あり。口縁部、30%残。	胎土 A F 散 H 多 焼成 良好 色調 淡褐色	
2	高 甕	脚径 12.4 器高 11.3	「ハ」の字状に開く脚部。内外面ともに刷毛整形の後、ナゲ調整を施し、赤彩する。脚部、50%残。	胎土 A 散 E 少 H 多 焼成 良好 色調 淡褐色	



土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を多量、白色微粒子を一様に多量含む。粘性、弱。しまり、強。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、焼土粒子をまばらに多量、白色微粒子を一様に多量、炭化物を多量含む。粘性、良。しまり、強。
2. 焼土ブロック 第2層に同じであるが、 $\phi 1 \sim 3$ mmの焼土粒子をブロック状に多量堆積する。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒子やブロックを多量、白色微粒子を多量、炭化物を少量含む。粘性、良。しまり、良。

第7図 第2号住居跡実測図及び遺物出土位置図



第8图 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡(第7図)

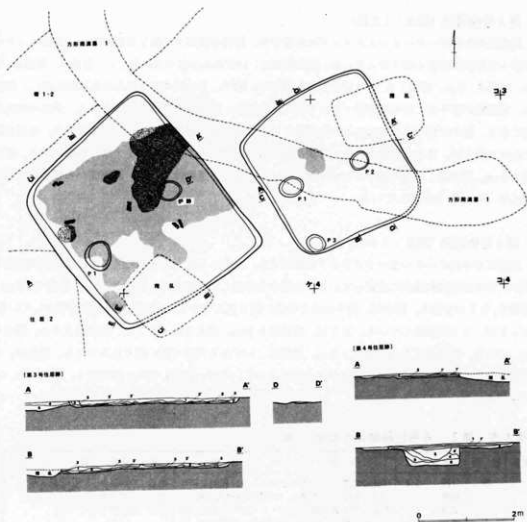
調査区の中央カ〜キー3〜5グリッドに位置する。南北・東西の軸がそれぞれ設定した座標軸に一致するような向きで構築されている。東北側コーナーで第3号住居跡と、西北コーナーで第1・2号堀と切り合っているが、新旧関係は覆土の堆積状況から本跡が最も古い。規模は、長径5.8m、短径5.6m、面積32.48㎡を測る。当遺跡内から検出されている住居跡の中では、大型の部類に属するものである。形態は、整った方形プランを呈しており、確認面からの掘り込みは浅く、深さ20cmを測る。床面は段をもって構築されており、中央付近から東側に約15cmほど緩やかな傾斜で低くなっている。本跡は、床面や覆土中に焼土や炭火物が多量に含まれているため、火を受けたものであることが確認できる。ただし、ピットの覆土の堆積状況からは自然発火的な焼失家屋であろうか疑問が残る。明瞭な伊跡は検出できなかった。ピットは3カ所である。P1は、直径70cm、深さ46cm。P2は、直径52cm、深さ73cm。P3は、直径80cm、深さ33cm。いずれも円形で、支柱穴といえる。とくに、P1は壁に厚く粘土を貼っており、覆土が焼土で満たされていた。遺物は、一段低くなった東側に集中し多量に出土しており、小破片も含めると499点を数える。主なものとしては、ピットから検出したものがあげられるが、P1の焼土中や焼土の上面に接して壺形土器(No.1)や高坏形土器(No.7)、小型で丸底の埴形土器(No.8)が、P2より埴形土器(No.9)が出土している。

第2表 第2号住居跡出土遺物(1)(第8図)

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径 17.0 胴径 26.6 底径 8.0 器高 26.2	胴部中に最大径をもち偏球状を呈す。肩部及び下半部の張りは弱くなる。頸部は、「く」の字状に屈曲し微妙に外反しながら、短く開く。口縁部は、有段口縁となり、端部に平坦面を作り出す。底部は、中心部分が僅かに窪むが、平底である。外面、胴部は刷毛整形後ヘラミガキを、頸部は刷毛整形後ナデ調整を、口縁部は丁寧なナデ調整を施す。内面は、胴部は細かい刷毛整形を、口縁部は刷毛整形後ナデ調整を施す。外面及び口縁部内面を赤彩。砂粒等大きな含有物が少なく、均整がとれた形態であり、丁寧な仕上げである。残存、80%。	胎土 A数 焼成 FGH少 色調 橙褐色	
2	台付壺	口径 (17.2) 胴径 (24.6)	球形を呈する胴部。肩部に僅かな張りをもつ。頸部は、「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反ぎみに短く開く。口縁端部は丸くなる。外面、細かい刷毛整形、端部のみナデ調整を施す。内面、細かい刷毛整形後、ナデ調整を施す。肩部に指押さえ痕あり。残存、40%。脚台部を欠損する。	胎土 G少 焼成 F H多 色調 淡褐色	
3	壺	底径 (7.0)	平底の底部。微妙に内湾しながら立ち上がる。内外面ともに摩滅が著しく不明瞭であるが、ナデ調整痕を残す。底部、30%残。	胎土 G H少 焼成 良好 色調 淡褐色	

第3表 第2号住居跡出土遺物 (2)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
4	小型壺	底径 (4.8)	平底の底部、胴部に向かい、直線的に小さく立ち上がる。外面、刷毛整形後ナデ調整、内面、ナデ調整を施す。底部、40%残。	胎土 A E 微 H 少 焼成 良好 色調 淡褐色	
5	台付甕	脚径 (8.0)	「ハ」の字状に開く脚台部。端部に向かい僅かに内湾する。対外面ともに粗目の刷毛整形。脚台部、40%残。	胎土 A 微 F G 少 H 多 焼成 良好 色調 淡褐色	
6	高杯	口径 (18.6)	深さを感じさせる杯部。細く引き締まった接合部から、直線的に開き、上半分では僅かに内湾する。口縁端部は、内側に平坦面をもつ。下半部に粘土積み上げの接合痕を残す。内外面ともに摩滅が著しく不明瞭である。外面、細かい入念なヘラミガキ、口縁部には横方向のナデ調整を施す。内面、放射状に入念なヘラミガキ。口縁端部はナデ調整。内外面ともに赤彩痕あり。杯部、60%残。	胎土 A 微 G 少 H 多 焼成 良好 色調 淡褐色	
7	高杯	口径 (16.4) 脚径 (13.2) 器高 15.4	底面を平たくし、斜めに屈曲させ内湾ぎみ立ち上がる杯部。口縁端部は尖る。脚部は、いったん円筒状を呈し、裾部が屈曲して開く。口径、底径に比して背の高さを感じさせる。内外面ともに摩滅著しく調整等が不明瞭である。杯部の内外面に僅かながらヘラミガキ痕が見られる。杯部内外と脚部外面を赤彩。残存、50% (杯部30%、脚部60%残)	胎土 H 少 E 多 焼成 良好 色調 淡褐色	
8	罎	口径 8.6 脚径 9.0 器高 8.0	丸底の底部。胴部は球形を呈し、頸部で屈曲し、口縁部が内湾する。口径、脚径の差が余りない。内外面ともに摩滅が著しく調整痕等が不明瞭である。内面の口縁部と外面に赤彩痕。残存、90%。	胎土 G・H (細) 少 焼成 不良 色調 淡褐色	
9	罎	口径 11.0 脚径 8.6 器高 9.8	丸底で球形を呈する胴部。頸部は屈曲し、口縁部は内湾しながら立ち上がる。脚径よりも口径の方が大きくなる。外面、胴部はナデ、口縁部はヘラミガキを施す。内面、胴部は小口状工具による横方向のナデ、口縁部は丁寧なナデ調整を施す。内面の口縁部と外面を赤彩。残存、100%。	胎土 A 微 H 多 焼成 良好 色調 淡褐色	
10	罎	脚径 8.3 底径 2.2	上げ底状を呈する底部。胴部は、横に張りをもつ。口縁部を欠損する。内外面の摩滅が著しく調整痕等が不明瞭。内面中位に輪積み痕が残る。外面に赤彩痕あり。胴部、40%。	胎土 A 微 E 少 H 多 焼成 良好 色調 橙褐色	
11	罎		丸底の底部。偏球状を呈する胴部。内面の肩部に輪積み痕 2 段残す。外面を赤彩。胴部、80%。	胎土 G 微 H (細) 少 焼成 不良 色調 橙褐色	



土層註

(第3号住居跡)

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を一概に多量、炭化物の細粒を微量、白色微粒子を一概に多量含む。粘性、弱。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、炭化物を少量、焼土粒子を多量含む。灰褐色粘土ブロックがまばらに入り込んでいる。粘性、弱。しまり、良。
- 2' 炭火物 第2層に同じであるが、多量な炭化物層。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、黒褐色粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。
4. 暗褐色土 黄褐色土粒子やブロックを少量、焼土粒子を多量、白色微粒子を一概に少量。粘性、弱。しまり、良。
5. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、黒褐色粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。

(第4号住居跡)

1. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色土粒子を微量、白色微粒子を一概に多量含む。粘性、弱。しまり、良。
- 1' 暗褐色土 第1層に同じであるが、 $\phi 3 \sim 5$ mm程の黄褐色土粒子をブロック状に多量に含む。粘性、良。しまり、良。
2. 黒褐色土 黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を少量、白色微粒子を多量含む。粘性、強。しまり、良。

第9図 第3・4号住居跡実測図

第3号住居跡 (第9・10図)

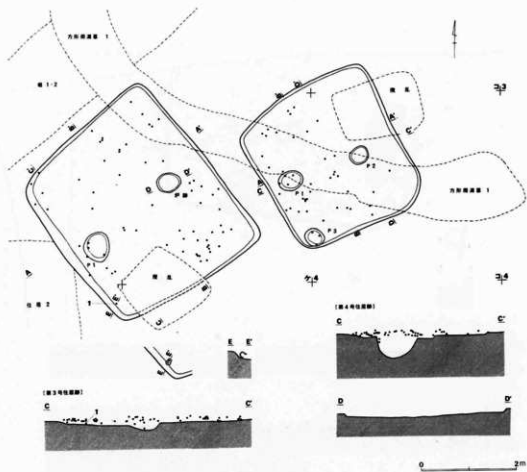
調査区の中央キヘター3～4グリッドに位置する。西側の壁部分で第2号住居跡と、北側コーナーで第1号方形周溝基と切り合っている。新旧関係は、いずれも本跡の方が新しい。規模は、長さ4.1m、短径3.6m、面積14.76㎡を測る。深さは、約7.0cm程で掘り込みは比較的に浅い。形態は、南北軸が若干長くなる長方形プランである。床面は、ほぼ水平な掘り込みである。炉跡は中央東側にあり、僅かな掘り込みではあるが直径約40cmほどの楕円形である。住居内の覆土は、ほぼ全面にわたり焼土が、さらに東側をによって炭化物が散在している。ピットは1カ所で西側にあり、直径約60cm、深さ約15cmの緩やかなすり鉢状を呈している。遺物は少なく、西南側から壁に接して壺形土器(No.1)を出土している。

第4号住居跡 (第9・10図)

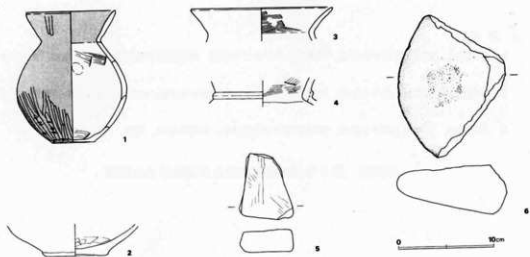
調査区の中央クヘター2～3グリッドに位置する。北側から掘り込まれてくる第1号方形周溝基の溝が、中央部を対角線状に横切っている。本跡の方が新しい。規模は、長さ3.3m、短径2.9m、面積9.57㎡を測る。深さは、約7cmほどの浅い掘り込みである。形態は、隅丸方形を呈している。ピットは、3カ所検出している。P1は、直径約50cm、深さ2cm。P2は、直径約40cm、深さ3cm。P3は、直径約40cm、深さ18cm。形態は、いずれも円形で浅い掘り込みである。遺物は、小破片も含めて古墳時代前期の土器等が52点出土しているが、図示し得る土器は無く、敲石(No.6)のみであった。

第4表 第3・4号住居跡出土遺物 (第11図)

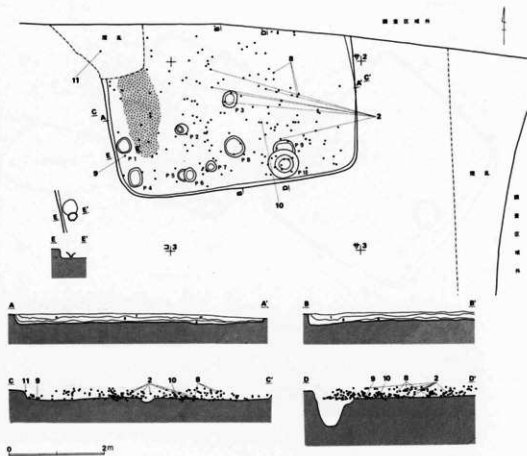
番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径 9.4 胴径 11.6 底径 4.6 器高 13.9	平底の底部、ヘラ状の工具により、底面を削り出す。胴部は弱く張り、口縁部は直線的に開く。外面、刷毛整形後ナゲとヘラミガキを施す。内面、刷毛整形痕を残しナゲ調整。肩部には、指押さえ痕を残す。内面の口縁部と外面を赤彩。残存、95% (胴部の一部を欠損)。	胎土 FGH多 焼成 やや不良 色調 淡褐色	第3号住
2	壺	底径 7.0	微妙な上げ底状を呈する底部。外面は押さえるように平坦に整える。内面に粗砂の圧痕が残る。刷毛整形後、ナゲ調整を施す。内面は丁寧なヘラナゲ調整。底部、100%残。	胎土 AD散FGH少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	第3号住
3	台付壺	口径 14.8	弱く「く」の字状に屈曲する頸部。内外面ともに摩滅が著しく調整が不明瞭であるが、刷毛整形後ナゲ調整を加える。口縁部、5%残。	胎土 AF散G少H多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	第3号住
4	壺	頸部径 10.6	断面三角形の尖帯がめぐる頸部。内外面ともに摩滅が著しく調整等不明瞭であるが、内面に刷毛整形痕や輪襷み痕が残る。頸部、5%残。	胎土 AF側散 G多 焼成 やや不良 色調 橙灰褐色	第3号住
5	砥石	長さ (7.0) 幅 (5.2) 厚さ (2.4) 重さ 125g	表面及び右側面を、研ぎ面とする。表面には数条の溝が残る。	石質 砂岩 色調 灰褐色	第3号住
6	凹石	厚さ (5.2) 重さ (980g)	全体の1/4の残存であるが、中央部に敲打痕と見られる凹部分が残る。	石質 閃緑岩 色調 淡褐色	第4号住



第10図 第3・4号住居跡遺物出土位置図



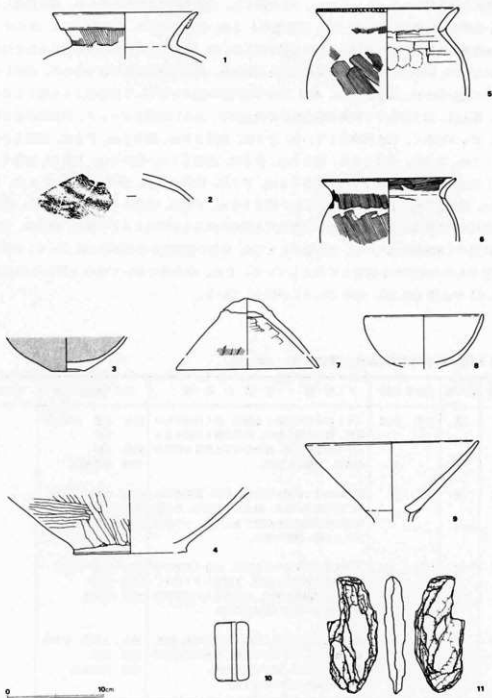
第11図 第3・4号住居跡出土遺物実測図



土層註

1. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色土粒子をごく微量、白色散粒子を微量、含む。粘性、良。しまり、強。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子を微量、灰褐色粒子を少量、焼土粒子を多量、炭化物を微量含む。粘性、良。しまり、強。
3. 黒褐色土 黄褐色土粒子を多量、橙褐色粒子を多量含む。鉄斑を含む。粘性、良。しまり、強。

第12図 第5号住居跡実測図及び遺物出土位置図



第13图 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡(第12図)

調査区の北東部ケ〜コー1〜2グリッドに位置する。北側で調査区域外となるが、他の遺構との切り合いはない。規模は、長径5.3m、短径推定4.3m、面積推定22.79㎡を測る。深さは、約21cm程あり黄褐色粘土面までしっかりと掘り込んでいる。形態は、北側が調査区域外となるため定かではないが、隅が若干丸くなる隅丸長方形と思われる。床面は全体的に平坦であるが、図示した西側の壁に近い部分が、長さ2.0m、幅0.8mで楕円形の広がりをもち周辺部よりも堅くしまっていた。覆土は、第2層中より灰褐色粘土粒子や焼土粒子、あるいは焼土ブロック、炭化物が含まれていた。ピットは多く、10カ所検出している。P1は、直径36cm、深さ6cm。P2は、直径28cm、深さ17cm。P3は、直径38cm、深さ8cm。P4は、直径40cm、深さ9cm。P5は、直径28cm、深さ15cm。P6は、直径30cm、深さ14cm。P7は、直径24cm、深さ12cm。P8は、直径46cm、深さ12cm。P9は、直径44cm、深さ10cm。P10は、直径64cm、深さ54cm。数多く検出されている割には、深さにおいて主柱穴と決めかねるものがほとんどである。遺物は、他の住居跡に比べて多数検出している。主なものとしては、西側の壁付近から高環形土器(No.9)が脚部を欠損するものの床面から直立して出土している。また、中央部においては中上層から壺形土器(No.2)や土錘(No.10)、高環(No.8)が出土している。

第5表 第5号住居跡出土遺物(1)(第13図)

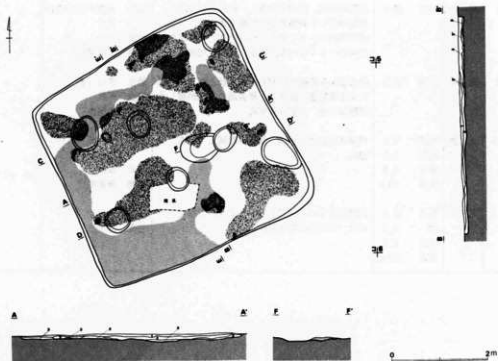
番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径 15.2	「く」の字状に屈曲する頸部。短く外反する口縁部。複合口縁となる。肩部の張りは強くなるようである。外面、複合部の下に粗目の刷毛目が残る。口縁部、10%。	胎土 D数 AGH少 F多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
2	壺		頸部に向けて収縮する肩部。外面、頸部の下から二段の施文がある。縄文をめぐらせ、その間にはS字状給筋文を配置する。内面、ヘラ状工具による粗い調整である。	胎土 A数 EH多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
3	壺	底径 3.6	上げ底状を呈する小さな底部。大きく湾曲しながら胴部に向かう。外面、丁寧なヘラミガキ。内面、ナデ調整を施す。内外面ともに赤彩痕を残す。残存、20%(底部は完存)。	胎土 F数 EH少 焼成 良好 色調 橙褐色	
4	壺	底径 11.8	底部から直線的に開く胴部。底部は平底。外面、縦・横方向、ヘラミガキ調整。部分的に黒斑が見られる。内面、細かい刷毛調整。残存、底部から胴下半部5%。	胎土 AD数 FH多 焼成 良好 色調 灰橙褐色	

第6表 第5号住居跡出土遺物 (2)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
5	台付甕	口径 14.8	頸部は緩やかに曲がり口縁部にいたる。口唇部に刻み目を施す。外面、刷毛整形後、横方向のナデ調整。内面、口縁部の接合痕や肩部の指押さえ痕を僅かに残す。丁寧なナデ調整。一部に木口状工具による調整あり。口縁部、15%残。	胎土 F散 GH多 焼成 やや不良 色調 橙褐色	
6	台付甕	口径 14.0	緩やかに屈曲する頸部。口縁部は短く外反する。口唇部に刻み目を施す。外面、細かい刷毛整形後、口縁部には横方向のナデ調整を加える。内面、口縁部のみ刷毛整形。頸部に接合痕を残す。胴部は、ナデ調整。口縁部、20%残。	胎土 AF散 GH多 焼成 良好 色調 橙褐色	
7	台付甕		接合部からやや膨らみをもちながら開く脚台部。頂部外面においては、体部が剝落しているが接合の状態を示す。外面、刷毛整形。内面、木口状工具による整形痕を残す。胎土に小石が混じる。脚台部、30%残。	胎土 D散 FGH多 焼成 やや不良 色調 にぶい橙褐色	
8	高 杯	口径 12.4	碗形の杯部。脚部を欠損し、杯底部が抜ける。摩滅が著しく調整等が不明瞭であるが、外面には横方向のヘラミガキ痕が、内面には丁寧な縦方向のヘラミガキ痕が残る。杯部、70%残。	胎土 A散F(細)G少 H多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
9	高 杯	口径 18.2	接合部から直線的に開く。漏斗状となる。脚部を欠き杯底部が抜ける。器表面の摩滅が著しく調整等不明。杯部のみ完存。	胎土 FGH多 焼成 不良 色調 赤褐色	
10	土 甕	外径 3.6 内径 1.0 厚さ 1.3 重さ 80g	円筒状を呈する土甕。表面が摩耗している。完存。	胎土 AD多 GH少 (白色針状粒子) 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
11	石 弁	長さ 12.3 幅 5.2 厚さ 2.2 重さ 160g	表裏面ともに周辺部を細かく欠き、刃部を作り出す。短冊状の打製石弁。	石質 千枚岩 色調 灰褐色	

第6号住居跡 (第14・15図)

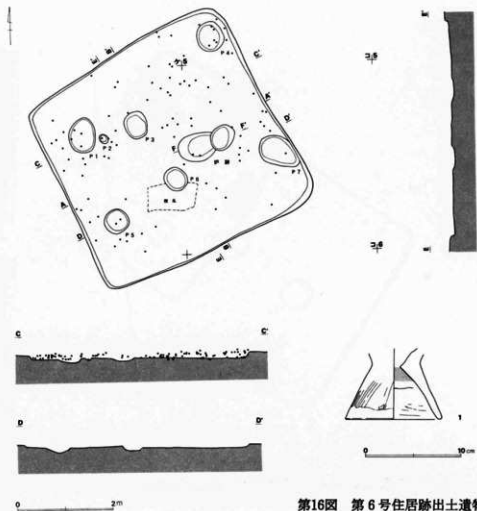
調査区の中央タ〜ケー4〜6グリッドに位置する。切り合う遺構は無く、単独で検出されている。規模は、長径・短径ともに約4.6m、面積21.16㎡を測る。深さは9cmと浅い掘り込みである。形態は、ほぼ正方形を呈している。覆土の第2層中より焼土や炭化物が全面に広がっており、焼失家屋とみられる。炉跡は、中央やや東側の位置に2カ所あり、部分的に重なりをもつて浅いピット状に掘り込まれている。中央に近い大きい方が楕円形で、長径120cm、短径50cm、深さ9cmを測る。東側のものが円形で、直径52cm、深さ4cmを測る。両方が繋がるようである。焼土は、東側を中心に底面に約8cmの厚さをもつて検出されている。ピットは、7カ所検出している。P1は、直径74cm、深さ8cm。P2は、直径22cm、深さ5cm。P3は直径60cm、深さ5cm。P4は、直径60cm、深さ7cm。P5は、直径52cm、深さ10cm。P6は、直径52cm、深さ6cm。P7は、長径94cm、短径62cm、深さ7cm。深さはいずれも10cm以内の浅い掘り込みで、P2を除いて同じような規模・形態となっており、柱穴と思われる。遺物は、全体的に散在していた。図示できたものは残念であるが台付甕形土器の脚台部 (No. 1) のみで、古墳時代前期のものが小破片を含めると105点出土している。



土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子やブロックを少量、白色散粒子を一様に多量。粘性、弱。しまり、良。
2. 暗褐色土 焼土粒子を多量、白色散粒子を一様に多量、炭化物を少量含む。粘性、良。しまり、良。
- 2' 炭化物 第2層に同じであるが、多量な炭化物層。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土粒子をブロック状に少量含む。粘性、良。しまり、良。

第14図 第6号住居跡実測図

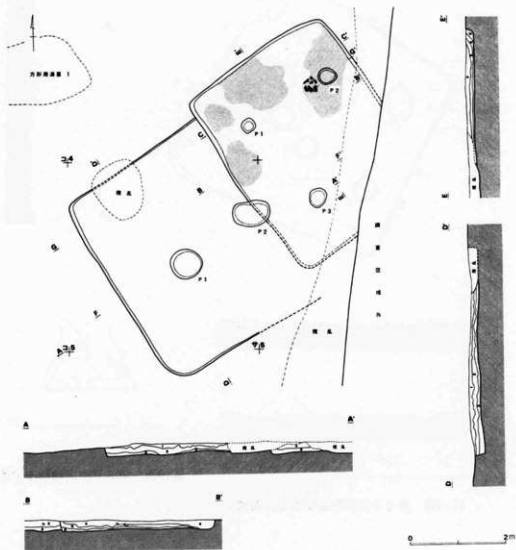


第15図 第6号住居跡遺物出土位置図

第16図 第6号住居跡出土遺物実測図

第7表 第6号住居跡出土遺物 (第16図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	台付甕	脚径 10.2	直線的に開く脚台部。外面、粗い刷毛整形、端部付近はナゲ調整を加える。内面、ナゲ調整、基部に赤彩痕あり。脚台部のみ残存。	胎土 C数 A少 H多 焼成 良好 色調 橙褐色	



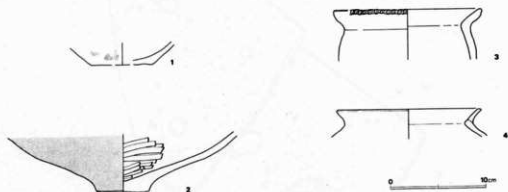
土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を微量、焼土粒子を微量、灰白色土ブロックを多量含む。粘性、良。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子をごく微量、焼土粒子をまばらに多量、炭化物をまばらに少量含む。粘性、弱。しまり、良。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒子を一様に多量、黄褐色土ブロックを少量。粘性、良。しまり、強。
4. 明褐色土 黄褐色土粒子を微量、焼土粒子を微量、灰白色土ブロックを多量含む。粘性、良。しまり、良。
5. 明褐色土 焼土粒子を多量、焼土ブロックを少量、白色微粒子を一様に多量、炭化物を多量含む。粘性、良。しまり、良。
6. 暗褐色土 黄褐色土粒子を少量、焼土粒子を微量含む。粘性、良。しまり、良。
6. 暗褐色土 第6層に同じであるが、黄褐色土粒子やブロックを多量に含む。粘性、良（第6層よりも強）。しまり、良。

第17図 第7・8号住居跡実測図

第7号住居跡 (第17・19図)

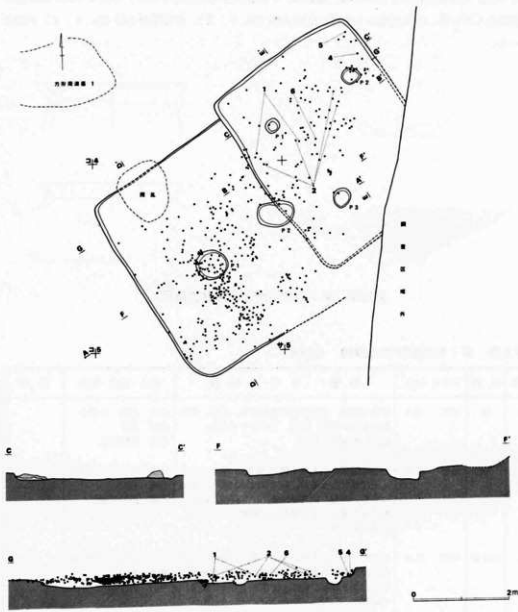
調査区の東側コヘサー3～5グリッドに位置する。東側で第8号住居跡と切り合っている。新旧関係は、本跡の方が古い。また、住居跡や調査区域の東側から大きな攪乱に会い、東北側の2カ所のコーナーを欠く。規模は、長径推定5.0m、短径4.4m、深さ約10cm、面積22.0㎡を測る。ピットは、2カ所検出している。P1は、直径66cm、深さ7cm。P2は、長径76cm、短径50cm、深さ21cm。両方とも柱穴と思われる。遺物は、中央部に多く散在しており、中層より上から少破片が多数出土している。主な遺物としては、壺形土器(No.1, 2)、台付甕形土器(No.3, 4)が出土している。



第18図 第7号住居跡出土遺物実測図

第8表 第7号住居跡出土遺物 (第18図)

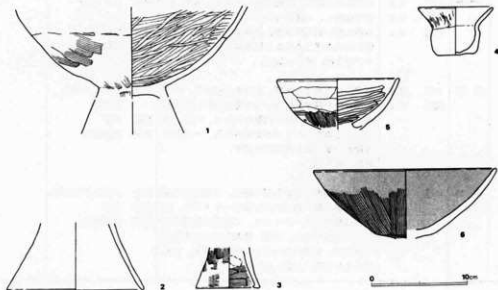
番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	底径 6.4	平底の底部。底面を削り調整する。外面、刷毛整形後ナゲ調整。内面、丁寧なナゲ調整。底部、30%残。	胎土 F微 GH少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
2	壺	底径 5.6	小さな底部から大きく開く。底面は、中心が小さく上げ底状となるが、周辺部は平坦面を丁寧に作る。外面、刷毛整形後、ナゲ調整。内面、木口状工具による丁寧なナゲ調整。外面を赤彩。底部、40%残。	胎土 A F少 GH多 焼成 良好 色調 淡橙灰褐色	
3	台付甕	口径 15.4	頸部から微妙に内湾しながら開く口縁部。口唇部には、棒状工具による刺突の刻み目を施す。外面、ナゲ調整。内面、丁寧なミガキを施す。口縁部、5%残。	胎土 A微 F H(相)多 焼成 良好 色調 暗橙褐色	
4	台付甕	口径 15.0	「く」の字状に屈曲する頸部。口縁部は短く、口唇端部を平坦にする。外面、刷毛整形後、ナゲ調整。内面、ナゲ調整。口縁部、5%残。	胎土 A微 F GH(相)多 焼成 良好 色調 暗橙褐色	



第19図 第7・8号住居跡遺物出土位置図

第8号住居跡 (第17・19図)

調査区の東側コーナー3～4グリッドに位置する。西側に同じ傾きをもって、第7号住居跡と切り合っている。新旧関係は、本跡の方が新しい。また、東側のコーナーを攪乱により大きく欠いている。さらに、点線で図示した覆土上面は、より広範囲に攪乱を受けている。規模は、長径4.1m、短径3.5m、面積14.35㎡を測る比較的小型の住居である。北側の覆土中から焼土や炭化物が床面より検出されており、焼失家屋と思われる。ピットは、3カ所検出した。P1は、直径30cm、深さ7cm。P2は、直径40cm、深さ16cm。P3は、直径40cm、深さ18cm。いずれも、同じような大きさや形態となっており、柱穴と思われる。遺物は、攪乱を受けた東側付近を除き、全体に広がって出土している。主な遺物としては、中央付近から台付甕形土器(No.1,2)や高環形土器(No.6)が、北側コーナー付近から小型壺形土器(No.4)や高環形土器(No.5)が出土している。

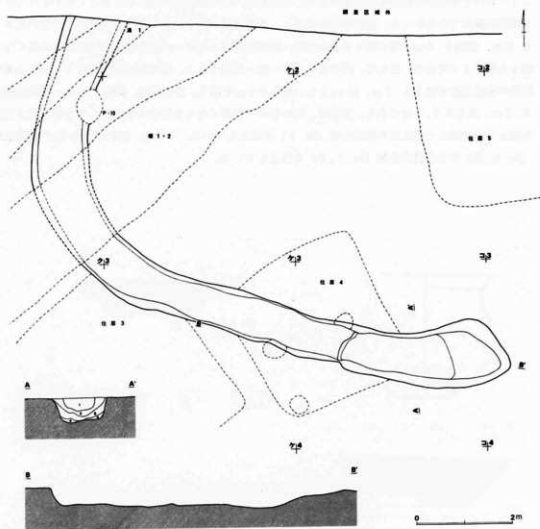


第20図 第8号住居跡出土遺物実測図

第9表 第8号住居跡出土遺物 (第20図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	台付甕		脚台部から緩やかに膨らみをもちながら立ち上がる胴下半部。外面には、粘土接合痕が残る。外面、刷毛整形(表面が柔らかい状態での整形である)。内面、斜方向に立ち上げるように丁寧かつ入念なヘラミガキが施されている。外面の胴部中に僅が付着する。残存、30%。	胎土 AC数 D少 FH多 焼成 良好 色調 暗橙褐色	
2	台付甕	脚径 14.5	緩やかに外反しながら開く脚台部。内外面ともに摩滅が著しく調整等不明瞭。脚台部、90%残。	胎土 G数 F少 H多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
3	台付甕	脚径 6.7	直線的に、やや外反するように開く小型の脚台部。内面の裾部は折り返すようになり、端部は平面を作り出す。外面、細かい刷毛整形後、ナゲ調整。内面、横方向の刷毛整形を施し、上部は指ナゲを加える。脚台部、70%残。	胎土 FH(細)多 焼成 良好 色調 暗橙褐色	
4	小型甕	口径 7.9 底径 3.9 器高 5.1	手握ねの小型甕。平底で丸みの少ない体部。中で収縮し、口縁部で大きく外に開く。外面、口縁に粗い刷毛整形後、全体にナゲ調整。内面、僅かに木口状工具による調整痕が残る。全体にナゲ仕上げ。残存、30%。	胎土 AEG数 F少 H多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
5	高 环	口径 12.8 底径 4.2	緩やかに内湾する环部。脚部を欠損する。底部に接合痕を残す。外面、下半部を細かい刷毛整形。後、横方向のナゲ調整を加える。内面、斜方向の丁寧なヘラミガキが施される。一部分には細かい刷毛状の整形痕を残す。环部、80%残。	胎土 E少 F(数) GH多 焼成 良好 色調 赤橙褐色	
6	高 环	口径 19.2	緩やかに内湾しながら開く环部。口唇端部は尖る。外面、縦・斜方向の丁寧なヘラミガキ。接合部は横方向のヘラミガキ。口縁部は剥落が著しく不明瞭である。内面、摩滅しており不明瞭であるが、斜方向のヘラミガキ痕が残る。内外面ともに赤彩。环部、30%。	胎土 ADEFH脚多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	

(2) 周溝墓と出土遺物



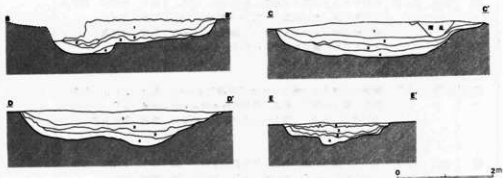
土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子をブロック状に多量、赤褐色粒子をまばらに微量、白色微粒子を一様に多量。炭化物を微量含む。粘性、弱。しまり、良。
2. 黒褐色土 黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子をまばらに微量、白色微粒子を一様に微量含む、粘性、良。しまり、良。
- 2' 暗褐色土 第2層に同じであるが、黄褐色粘土ブロック塊。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒子やブロックを多量、赤褐色粒子を少量、白色微粒子を微量、炭化物を少量含む、粘性、良。しまり、良。下部には、黄褐色土や焼土のブロックとともに土器を検出。
4. 暗褐色土 黄褐色土粒子をブロック状に多量、白色微粒子を微量含む。粘性、良。しまり、良。

第21図 第1号方形周溝墓実測図

第10表 第1号方形周溝墓出土遺物 (第22図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	広口壺	口径 (14.0) 胴径 14.8 底径 6.4 器高 13.1	頸部から小さく外傾する口縁部。複合口縁を呈する。頸部は「く」の字状に弱く屈曲する。胴部も張り力が弱く、胴部は中位で膨らみ底部にいたる。底部は平底で、削り込み調整をせる。外面、刷毛整形後、ナゲ調整。さらに、ヘラミガキを加える。内面、胴部中位に輪痕み痕を残し、丁寧なナゲ調整を施す。残存、80%。	胎土 H少 EFG多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
2	壺	底径 9.2	底部から直線的に開く。不明瞭であるが、内外面ともに丁寧なヘラミガキ。内面には部分的に刷毛目を残す。外面の底部を除き、内外面ともに赤彩。底部、30%残。	胎土 F少 GH多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
3	壺	底径 6.8	平底の底部から再曲するように開く。外面、ヘラミガキ調整。内面、丁寧なナゲ調整。底面には、木葉痕を残す。外面を赤彩。底部、10%残。	胎土 H少 GF多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
4	壺	口径 (14.4)	外反するように開く口縁部。複合口縁。外面、刷毛整形後、ナゲ調整。内面、不明瞭であるが、横方向の細かいヘラミガキ。上部部から1cmほどのところに刷毛目を残す。内外面ともに赤彩痕あり。口縁部、5%残。	胎土 DH少 GF多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
5	壺	口径 (8.3)	微妙に内湾する口縁部。外面、不明瞭であるが、地文に縄文を施し、断面三角形の棒状浮文を貼り付ける。内面、丁寧なヘラミガキ調整。内面を赤彩。口縁部、5%残。	胎土 FH少 G多 焼成 良好 色調 暗灰褐色	
6	壺	口径 (23.8)	幅の広い複合口縁。外面、刷毛整形を施し、棒状浮文を貼り付け、刺突を加える。内面、丁寧なナゲ調整。口唇部には縄文を施す。内外面ともに赤彩痕あり。口縁部、5%残。	胎土 F(敷) G少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
7	台付甕	口径 (20.4)	弱く「く」の字状に屈曲する頸部から口縁部。口唇部には、棒状工具による刺突で刷毛目を残す。外面、粗い刷毛整形、内面、丁寧なナゲ調整。口縁部、5%残。	胎土 FGH多 焼成 良好 色調 暗灰褐色	
8	台付甕	脚径 (11.0)	接合部から直線的に開く脚台部。内外面ともに摩滅が著しく調整が不明瞭であるが、内面の上部に僅かにヘラミガキ調整痕を残す。脚台部、90%残。	胎土 FGH多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	



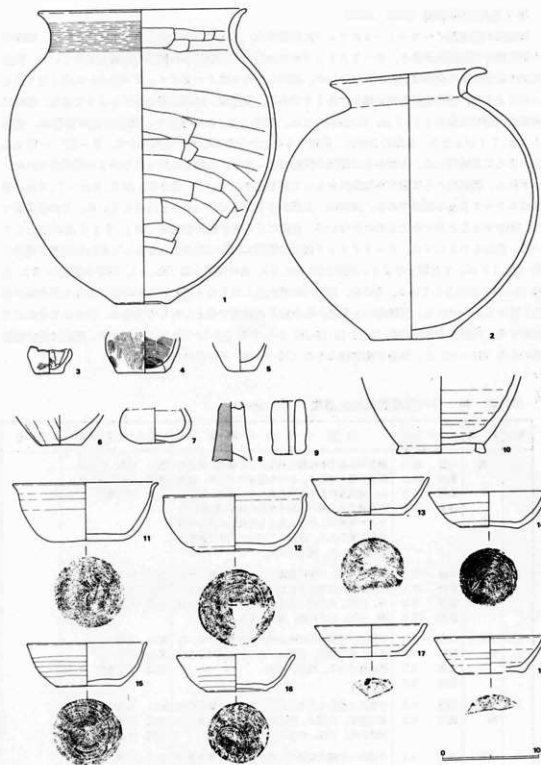
土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を一様に少量、赤褐色粒子を微量、白色微粒子を一様に多量、炭化物をごく微量含む、粘性、弱。しまり、良。
2. 暗黒褐色土 黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子を微量、白色微粒子を少量、炭化物を少量含む。粘性、良。しまり、良。
3. 暗灰褐色土 黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を少量、白色微粒子を微量、炭化物を少量含む。鉄斑が多量に見られる。粘性、強。しまり、良。
4. 暗灰褐色土 黄褐色土粒子をブロック状に多量、白色微粒子を微量含む。鉄斑が多量に見られる。粘性、強。しまり、良。
5. 灰褐色土 黄褐色土粒子を微量、白色微粒子を一様に多量含む。鉄斑あり。粘性、強。しまり、強。強質の還元土（上層の水田跡カ）

第23図 第1号円形周溝墓土層断面図



第24図 第1号円形周溝墓実測図及び遺物出土位置図



第25图 第1号円形周溝墓出土遺物実測図

第1号円形周溝墓 (第23・24図)

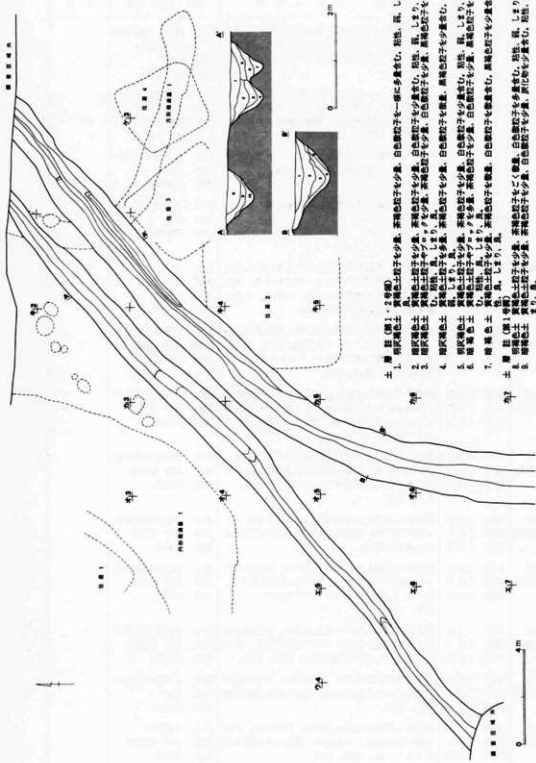
調査区の西北側イ〜カー1〜4グリッドに位置する。本跡はとくに切り合う遺構はないが、周溝の内側に第1号住居跡があり、ウー3グリッドから西側では上層部から掘削の影響を受けている。調査区域の設定もあり全容は明らかではないが、図示したようにイー2グリッドで緩やかに浅くなり立ち上がるようで、南西付近を開口部とするようである。形態は、ほぼ円形を呈するようである。規模は、周溝の内側の直径は13.2m、幅は約3.8m、深さ42.0cmを測り、周溝内側の面積は、推定136.77㎡となる。主軸の方向は、推定する中心から南西の開口部に向けて、S-50°-Wである。さらに周溝内には、上面からは確認が困難であったが、土塊状の掘り込みが4カ所検出された。いずれも、溝底面からは緩やかな傾斜をもって掘り込まれている。長さは、約5.5m〜7.2m、深さは52〜72cmの規模である。遺物は、上層から下層までびっしりと出土している。この報告書では、図示することができたものは少ないが、総数にすると小破片を含めて約1,200点が出土している。主なものとしては、オー3グリッド付近の底面に僅かな掘り込みをもって倒れた状態で甕形土器 (No. 1) が、また覆土中より、碗形土器 (No. 6)、台付甕形土器 (No. 4)、高杯の脚 (No. 8)、土鍾 (No. 9) が出土している。その他、周溝内に流れ込んだものと思われるが時期が異なる須恵器が出土している。いずれも、周溝内の上層部から小破片の状態で出土したものである。接合ができたので掲載する。時期は9世紀前葉 (No. 11・12・13・15) から中葉 (10・14・16) のものであり、窯跡は鳩山窯跡群のもの (11〜16) と、東金子窯跡群のもの (10・17・18) とに分けられる。

第11表 第1号円形周溝墓出土遺物 (1) (第25図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	口径 22.0 胴径 28.2 底径 6.2 器高 31.2	頸部から緩やかに短く外反する口縁部。肩部や胴部の張りは弱く、小さな底部にいたる。底部は、焼成後打ち欠き穿孔される。外面、頸部にのみ横方向の細かい刷毛整形を施す。整形には、ロクロを使用したとも思える連続性のある作業の跡が見られる。内面、丁寧なヘラナゲ調整が行われている。残存、85%。	胎土 A級 FH多 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
2	甕	口径 16.6 胴径 27.0 底径 8.5 器高 28.0	頸部が「く」の字に屈曲し、口縁部は短く外反する。胴部は球形となり、最大径を中上位とする。外面、斜方向 (左上がり) の丁寧なナゲ調整。内面、ナゲ調整。残存、60%。	胎土 D少 EFH多 焼成 良好 色調 淡褐色	
3	手捏土器	口径 4.1 胴径 4.7 底径 2.9 器高 2.9	平底で、底部から立ち上がり聞き湾曲する。外面は、刷毛整形。内面は、小口状工具による調整が施される。残存、70%。	胎土 E級 F少 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
4	手捏土器	胴径 7.8 底径 5.2	平底から湾曲し立ち上がる。外面は、縦方向の刷毛整形。内面は、横方向の丁寧な刷毛整形が施される。残存、80%。	胎土 H級 EF少 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
5	手捏土器	底径 4.4	平底から直線的に開く。内外面ともに摩滅著しく調整等不明。残存、底部のみ完存。	胎土 H級 EF少 焼成 やや不良 色調 褐色	

第12表 第1号円形周溝墓出土遺物 (2)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
6	鉢	底径 4.5	平底の底部。直線的に立ち上がる胴部。外面、ヘラ状工具により上方向に向けて削り、整形される。内面、木口状工具による整形。底部のみ完存。	胎土 A少 F(微)多 H(粗)多 焼成 良好 色調 淡褐色	
7	埴	胴径 7.5 底径 3.2	上げ底状となる底部。胴部の張りは強い。表面の摩滅が著しく固化できないが、外面はヘラミガキ、内面は丁寧なナゲ調整を施す。外面を赤彩。残存、胴部から底部60%。	胎土 D H微 E少 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
8	高杯		柱状となる脚部。裾部を欠損する。外面、丁寧なヘラミガキ後赤彩。脚部、30%残。	胎土 G微 E少 H(粗)多 焼成 不良 色調 淡褐色	
9	土甕	外径 3.6 内径 1.2 厚さ 1.3 重さ (40g)	円筒状の土甕。内外面ともに摩滅が著しい。	胎土 AD微 GH多 焼成 不良 色調 淡褐色	
10	長頸壺	高台径 9.4	胴部は、やや緩やかに膨らみをもちながら立ち上がる。底部は平底となり、高台を付す。外面には、僅かに自然釉がかかる。内面は、ロクロ整形痕が残る。底部のみ完存。	胎土 F H多 焼成 良好(堅緻) 色調 灰褐色	
11	鉢 (須恵器)	口径 (15.4) 底径 (7.6) 器高 (6.2)	底部から緩やかに内湾しながら、端部では外傾する。外面には、ロクロ整形痕が残る。底面には、糸切り離し痕を残さず、ヘラケズリを施し、平坦にする。残存、40%。	胎土 白色針状粒子多 焼成 良好(堅緻) 色調 淡灰褐色	
12	鉢 (須恵器)	口径 (15.0) 底径 (8.2) 器高 (6.0)	緩やかに内湾しながら立ち上がる。口縁端部はつまみ上げたように外傾する。底面は糸切り離し跡を残すが、端から約1.5cmほどの幅をヘラケズリを施す。残存、50%。	胎土 白色針状粒子少 焼成 良好(堅緻) 色調 灰褐色	
13	杯 (須恵器)	口径 (12.3) 底径 (6.8) 器高 (3.9)	底部から段を持つように直線的に立ち上がる。底面には、糸切り離し痕を残し、外周部分からはじまり、内側に向けてヘラケズリを施す。残存、30%	胎土 白色針状粒子少 焼成 良好(堅緻) 色調 灰褐色	
14	杯 (須恵器)	口径 (12.6) 底径 (6.4) 器高 (3.7)	緩やかに内湾しながら立ち上がる。外面にロクロ整形痕あり。底面に糸切り離し痕が明瞭に残る。残存、60%。	胎土 白色針状粒子多 焼成 良好(堅緻) 色調 灰褐色	
15	杯 (須恵器)	口径 (12.6) 底径 (6.4) 器高 (4.6)	緩やかに内湾しながら立ち上がる。外面にロクロ整形痕が明瞭に残る。底面は、糸切り離し後、端から2.2cmの幅でヘラケズリを施す。残存、60%。	胎土 白色針状粒子多 焼成 良好(堅緻) 色調 灰褐色	
16	杯 (須恵器)	口径 (12.4) 底径 (6.4) 器高 (3.9)	緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で微妙に外傾する。外面にロクロ整形痕あり。底面に糸切り離し痕が明瞭に残る。残存、50%。	胎土 白色針状粒子多 焼成 良好(堅緻) 色調 灰褐色	
17	杯 (須恵器)	口径 (11.8) 底径 (6.6) 器高 (3.4)	底部から直接的に開く。口唇部は、平坦に面取りされている。底面には、糸切り離し痕が残る。残存、20%。	胎土 F(微) H(微)多 焼成 良好 色調 灰褐色	
18	杯 (須恵器)	口径 (11.8) 底径 (6.6) 器高 (3.9)	底部から直線的に立ち上がる。底面には、糸切り離し痕が残る。口唇部は、柔らかく面取りがなされている。残存、20%。	胎土 F(微)多 焼成 良好(堅緻) 色調 灰褐色	



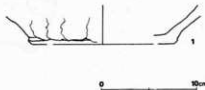
- 土層 註(第1・2号層)
1. 河床底土 灰褐色土粒子も少量、茶褐色粒子も少量、白色微粒子も一部に少量含む、粘性、弱、しまり、
 2. 河床底土 灰褐色土粒子も少量、茶褐色粒子も少量、白色微粒子も少量含む、粘性、弱、しまり、
 3. 河床底土 灰褐色土粒子も少量、茶褐色粒子も少量、白色微粒子も少量、黒褐色粒子も少量含む、粘性、弱、しまり、
 4. 河床底土 灰褐色土粒子も少量、茶褐色粒子も少量、白色微粒子も少量、黒褐色粒子も少量含む、粘性、弱、しまり、
 5. 河床底土 灰褐色土粒子も少量、茶褐色粒子も少量、白色微粒子も少量含む、粘性、弱、しまり、
 6. 河床底土 灰褐色土粒子も少量、茶褐色粒子も少量、白色微粒子も少量、黒褐色粒子も少量含む、粘性、弱、しまり、
 7. 河床底土 灰褐色土粒子も少量、茶褐色粒子も少量、白色微粒子も少量含む、粘性、弱、しまり、
- 土層 註(第1号層)
8. 河床底土 灰褐色土粒子も少量、茶褐色粒子も少量、白色微粒子も少量含む、粘性、弱、しまり、
 9. 河床底土 灰褐色土粒子も少量、茶褐色粒子も少量、白色微粒子も少量、黒褐色粒子も少量含む、粘性、弱、しまり、
 10. 河床底土 灰褐色土粒子も少量、茶褐色粒子も少量、白色微粒子も少量含む、粘性、弱、しまり、

第26図 第1号溝、第1・2号堀実測図

(3) 溝と出土遺物

第1号溝 (第26図)

調査区の中央から西側イ〜ケー1〜6グリッドに位置し、調査区の北側から南西に向けて直線的に掘られている。北側では、第1号方形周溝基と切り合い、中ほどまでは第1・2号堀と並行して構築されている。北・南側ともに調査区域外となる。形態は、ほぼ直線的で、断面はやや丸みを帯びるV字形を呈する。検出された長さは約30.0m、幅は1.0〜1.6m、深さは46〜62cmを測る。遺物は、グリッドごとに区分して一括して取り上げた。図示できたものは、常滑系の甕 (No. 1) が1片だけである。



第27図 第1号溝出土遺物実測図

第13表 第1号溝出土遺物 (第27図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	底径 (14.8)	常滑系。甕の底部。外面に縦方向のナゲ整形痕を残す。内面は丁寧なナゲ調整。底部、20%残。	胎土 F H多 焼成 良好 色調 暗灰褐色	

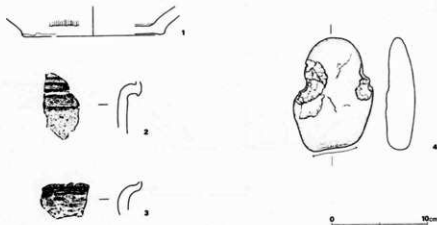
(4) 堀と出土遺物

第1号堀 (第26図)

調査区の中央エ〜ケー1〜7グリッドに位置する。第2号堀と北側から中央部までは軸を僅かに違えるが切り合い、中央部から南側は同一の線となる。新旧関係は、遺構断面の状況から本跡の方が新しいと判断できる。北から第1号溝と並行し南西方向に向かい、中央部で南へ曲線的に方向を変え調査区域外にいたる。規模は、検出部分で長さは30.6m、幅は約1.6〜2.0m、深さ60〜90cmを測る。断面の形態は、中央から北側ではV字形を呈する葉研堀で、南に向かうにしたがい上面の幅が広くなるようである。遺物は、常滑系の甕 (No. 1・2・3) が出土している。

第2号堀 (第26図)

調査区の中央カ〜ケー1〜4グリッドに位置する。この遺構は、第1号堀と形態・規模ともに同じような掘り方をしており、中央より北側の部分に見えるだけである。南側では、第1号堀と切り合い南側で姿を消してしまふ。断面の形態は、V字形を呈する薬研堀である。検出された規模は、長さは18.0m、幅は推定約1.2m、深さは45〜65cmを測る。遺物は、第1号堀と同じように陶器破片を数片出土したが、図示し得るものはなかった。時期的には、第1号堀と大きな差はないようである。



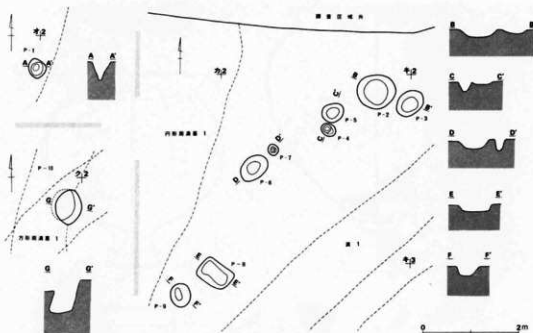
第28図 第1号堀出土遺物実測図

第14表 第1号堀出土遺物 (第28図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕	底径 (14.8)	常滑系。甕の底部、外面には、刷毛目状の整形痕を残す。底部、5%残。	胎土 F H多 焼成 不良 色調 橙褐色	
2	甕		常滑系。甕の頸部から口縁部。口縁部は折り返すように立ち上がる。頸部、1%残。	胎土 H少 F多 焼成 良好 (堅緻) 色調 灰褐色	
3	甕		常滑系。外反するように屈曲し、短く立ち上がる。内面は、灰釉がかかる。頸部、1%残。	胎土 A数 H少 F多 焼成 良好 (堅緻) 色調 淡橙褐色	
4	たたき石	長さ 12.1 幅 8.4 厚さ 3.1 重さ 370g	たたき石。下端に敲打痕を残す。中上位部の両側に打ち欠いた跡がある。柄を取り付けたのだろうか。表裏面は、自然面となり使用した痕跡はない。完存。	石質 砂岩 色調 黄灰褐色	

(5) その他の遺構と出土遺物

調査区の北側中央部にピット（第29図）を10ヶ所検出した。各ピットの形態や規模は、第15表に記したとおりである。配列や共通性は、見いだすことができなかった。



第29図 ピット実測図

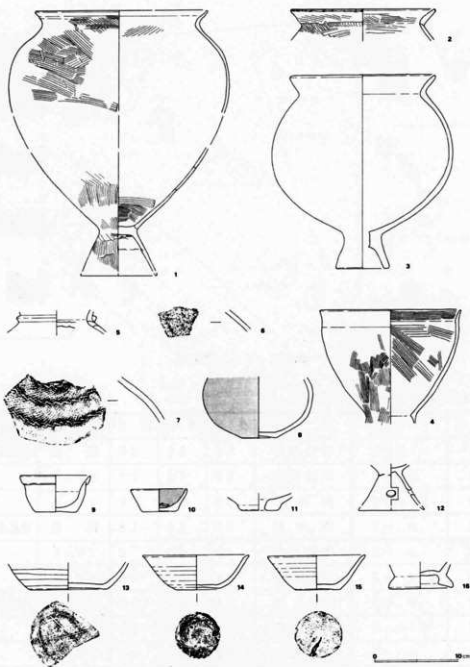
第15表 ピット一覧表 (第29図)

単位：cm

番号	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	底面径	備考
1	エ・オー2	不整円形	44	40	40	凹状	柱痕あり
2	カ-2	不整円形	82	72	17	フラット	
3	カ・キ-2	楕円形	64	48	8	フラット	
4	カ-2	楕円形	32	28	18	凹状	柱痕あり
5	カ-2	不整円形	48	40	6	フラット	
6	カ-2	不整楕円形	66	46	15	フラット	
7	カ-2	円形	24	22	24	凹状	柱痕あり
8	オ・カー3	不整方形	70	48	13	フラット	
9	オ-3	不整円形	52	40	22	フラット	
10	キ-2	不整楕円形	74	60	69	フラット	

(6) グリッド出土の遺物

遺構に伴わない遺物としてグリッドを単位にして取り上げたものである。ただし、図示した遺物は前建築物による攪乱を受けた中で、ケ〜コー6〜7グリッドにおいて辛うじて検出したものがほとんどである。



第30図 グリッド出土の遺物実測図

第16表 グリッド出土の遺物 (1) (第30図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	台付甕	口径 (10.3) 胴径 (13.2) 脚径 (4.4) 器高 (31.8)	肩部が強く張り、頸部が緩やかに屈曲するS字口縁の台付甕。胴部最大径を上位にもつ。脚台部は小さく「ハ」の字状に開く。下端を欠損する。外面、縦・斜方向の刷毛整形、頸部にナデを加える。内面、不明瞭であるが刷毛目を残す。残存、30%。	胎土 E少 FH多 焼成 良好 色調 淡褐色	
2	台付甕	口径 (17.4)	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲する。口唇部に縄目を押圧する。内外面を刷毛整形。口縁部については、ナデ調整を加える。口縁部、20%残。	胎土 A(数) D少 BF(数) H多 焼成 不良 色調 淡褐色	
3	台付甕	口径 (17.7) 胴径 (21.8) 脚径 (8.5) 器高 (23.6)	頸部は「く」の字状に屈曲し、短く開く。胴部は球形となり、最大径を中位にもつ。脚台部は体部の大きさと比較すると小さく、短く直線的に開く。体部の底には焼成前のものと思われる直径 3.6cmの穿孔が見られる。内外面ともに不明瞭であるがナデ調整が施されているようである。残存、65%。	胎土 E少 FH多 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
4	台付甕	口径 (17.0) 脚径 (16.6)	頸部は僅かに収縮し、口縁部は短く開く。胴部の最大径は口縁部よりも小さい。外面は縦方向の刷毛整形。内面は太めの刷毛整形が、口縁部は細い刷毛である。残存、体部40%。脚台部を欠損する。	胎土 EH少 F多 焼成 やや不良 色調 褐色	
5	甕		「く」の字状に屈曲する頸部。断面三角形の帯がめぐる。内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。頸部、30%残。	胎土 DGH少 F多 焼成 良好 色調 暗褐色	
6	甕		肩部破片。縄文を羽状に施す。その上下を鋸歯状に沈線が区画する。内面、ナデ調整。外面の文様帯を除いて赤彩。	胎土 FG少 H多 焼成 良好 色調 暗褐色	
7	甕		頸部から肩部にかけての破片。肩部の張りは弱い。外面、横方向のヘラミガキが施され、2段の縄文が、その端部にはS字状結節文が三段めぐる。内面、粗いナデ調整。外面の文様帯を除き、赤彩。肩部、20%。	胎土 D数 FH多 焼成 良好 色調 暗褐色	
8	甕	底径 4.2	小さな上げ底状となる底部から大きく膨らみ、球形を呈する胴部。外面、不明瞭であるがヘラミガキを施す。後、赤彩。胴下半部、60%残(底部は完存)。	胎土 E数 F(数) H(細)多 焼成 不良 色調 淡褐色	
9	小型甕	口径 (8.6) 底径 (5.0) 器高 (4.5)	底部から内湾しながら立ち上がる。口縁部は外傾し、複合口縁となる。底部は平底。内外面ともに剝落が著しいため、調整等は不明瞭。残存、70%。	胎土 A数GH(細)多 焼成 やや不良 色調 淡褐色	

第17表 グリッド出土の遺物 (2)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
10	小型杯	口径 (6.8) 底径 (4.2) 器高 (2.8)	手捏ねの杯。外面、粗雑なナゲ調整。内面、丁寧なミガキを施す。内面に赤彩痕。 残存、80%。	胎土 A 数 F (数) G (数) H 多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
11	飯	底径 4.4	小さく突出した底部。中心に径14mmの孔を、焼成前に穿つ。内外面ともに調整等不明瞭。 底部のみ完存。	胎土 A E 少 F (数) H (粗) 多 焼成 やや不良	
12	器台	脚径 (3.0)	受部から頸部にかけて細く収縮し、脚部で「ハ」の字状に大きく開く。脚部中に円孔を3カ所有する。脚部部を欠損する。外面、縦方向に細かい刷毛整形。内面上半がヘラナゲ、下半は横方向の細かい刷毛整形。受部内面は、刷毛整形後、丁寧なヘラミガキを施す。残存、30%。	胎土 A 数 F (数) H (粗) 多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
13	碗 (須恵器)	底径 (9.2)	底部から緩やかに膨らみをももながら立ち上がる。外面にロクロ整形痕あり。底面は、ヘラケズリが施されるが、細い棒状工具により「×」の線刻あり。底部、30%残。	胎土 F H 多 焼成 良好 色調 橙褐色	
14	杯 (須恵器)	口径 (13.0) 底径 (4.8) 器高 (4.2)	微妙に内湾しながら、口縁部で小さく外反する。外面にロクロ整形痕を、底面には糸切り離し痕を残す。残存、80%。	胎土 H 少 F (数) 多 白色針状粒子 焼成 良好 (堅硬) 色調 灰褐色	
15	杯	口径 (11.8) 底径 (5.2) 器高 (4.2)	底部から直線的に開き口縁部にいたる。外面、ロクロ整形痕あり。底面には、糸切り離し痕が不明瞭ながら見られる。残存、70%。	胎土 G 少 H 多 焼成 良好 色調 淡褐色	
16	台付鉢	高台径 (7.6)	古瀬戸。小さく幅の広い高台を付す。内面と脚部外面に自然釉が付着する。底部、40%残。	胎土 H 多 焼成 良好 色調 灰白色	

6 ま と め

南原遺跡は、自然堤防上に立地する遺跡群の南端に位置する。北側には、菖蒲川を挟んで南町遺跡、上戸田本村遺跡、さらに鍛冶谷・新田口遺跡が南北に連なっており、遺跡群を形成している。いずれも、弥生時代後期から古墳時代前期の土器を出土する集落跡で、この時期に自然堤防上に人々が移動して来る様子が窺われる。

今回の調査地点は、南原遺跡の集落の中程の位置にあたり、遺構の内容も豊富なものであった。検出された遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓が1基、古墳時代前期の住居跡が8軒、古墳時代後期前半の円形周溝墓が1基、中世の溝跡が1本と堀跡が2本である。

以下、検出した主な遺構についてまとめておきたい。

1) 住居跡について

第6次調査においては、住居跡を8軒検出した。いずれも古墳時代前期の五領期に位置付けられるものである。遺構の切り合いや調査区の関係から、全容が明らかになっていないものもある。ここでは、形態と規模についてまとめておきたい。

まず、検出された住居跡の形態を分類すると次のようである。方形(第2・6号住居跡)、隅丸方形(第1・4号住居跡)長方形(第3号住居跡)の3形態である。第5・7・8号住居跡については、全容が明らかになっていない。

次に、検出された住居跡の規模についてであるが、現在までの成果を含めて第31図に掲載した。第2号住居跡が大きく突出しているものの、他のものは約20㎡前後、あるいはそれよりも小さなものである。第5次調査の報告において行った分類と同じ様に以下に分類しておく(註1)。なお、第5・7・8号住居跡については、推定の面積である。

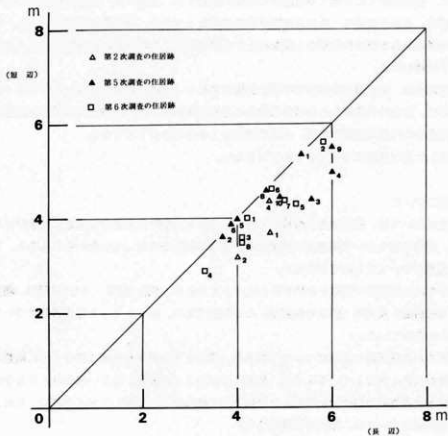
大型 (32.50㎡)	第2号住居跡
中型A (21.00㎡～22.80㎡)	第5・6・7号住居跡
中型B (14.30㎡～17.00㎡)	第1・3・8号住居跡
小型 (9.60㎡～14.80㎡)	第4号住居跡

このように、第5次調査区でもそうであったように、比較的大きな住居と小さな住居が混在している状況が受け取られる。

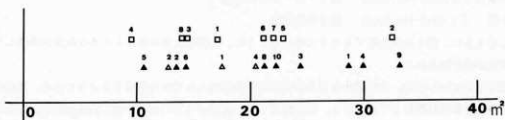
南原遺跡においては、住居跡から見ると古墳時代前期に入ってから進出するようである。現在までに、検出され住居跡は27軒(うち、前期は23軒)となっている。今後、調査を重ねることにより資料の増加を期待し、南北に連なる遺跡群の中で、南端域での集落の形態やそのあり方など検討して行きたいと考えている。

2) 円形周溝墓について

円形周溝墓は、この調査で検出されたものを含めると4基になる。いずれも、古墳時代後期前半の鬼高期に属するもので、6世紀初頭に位置づけられるものである。当調査地のものは、調査区域の北



規模分布



面積分布

第31図 住居跡比較図

側であり、後世の掘削により全体の4分の1の部分を検出しただけであるが、周溝の規模や形態そして遺物等、今までに検出されているものと同様のものである。

円形周溝墓については、古墳の出現との関係が問われるが、「方形周溝墓の伝統の踏襲」とみられ、「世帯共同体」社会における墓のあり方と認識されている(註2)。南原遺跡における古墳跡は、6世紀中葉のものが人物埴輪や形象埴輪を伴って、当調査地の北側に近接して築造されている。よって検出された円形周溝墓は古墳を築く社会的前段階の様相を物語っているようである。

3) 中世の遺構について

南原遺跡における中世の遺構としては、現在までに掘跡が3本検出されている。戸田の地における中世の歴史を物語るものとして考えられるのは、上戸田の多福院や海禅寺で、開基として畿起や由緒書に見える桃井播磨守直常の子中務少輔直和の戸田居住説である。それは、「戸田御所」「戸田城」「もものい屋敷」「百の井屋敷」等の名称とともに伝えられてきている。しかし、その所在地については、未だ明らかになっていないのが現状である。

今回の調査区域においては、掘跡が2本、溝跡が1本検出されている。いずれも、破片ではあるが常滑系の甕を出土しており、14世紀から15世紀に比定されるものである。掘跡は、2本がほぼ重なるように掘られ、埋没した後同じ場所に掘られているようである。第5次調査地では、第1・2号掘が調査区域のほぼ中央を南北に並行して掘られており、常滑系や瀬戸美濃系、古瀬戸、山茶碗系などの陶器を破片ではあるが検出されている(註3)。掘り方を見ると両地点ともに同じような傾向が窺われ、関連性など調査地点が離れていることや方向の違いなど即座に結び付けることは難しいが、興味深く見ることができる。今後、両方の掘跡を結び付ける資料や、建物跡などの資料が加えられることにより、館跡の存在や規模などが徐々に明らかになって行くことを期待したい。

註1 西口正純 『鍛冶谷・新田口』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986

註2 塩野 博 『戸田市史 通史編上』 戸田市 1986

註3 小島清一 『南原遺跡V』 戸田市遺跡調査会第3集 戸田市遺跡調査会 1991

【参考文献】

赤羽一郎 『常滑焼』 ニューサイエンス社 1984

伊藤和彦 『戸田と桃井氏備忘録』 戸田市立郷土博物館研究紀要第4号 1989

塩野博・伊藤和彦 『南原第1次発掘調査概要』 戸田市文化財調査報告Ⅲ 戸田市教育委員会
1970

塩野博・伊藤和彦 『南原第2・3次発掘調査概要』 戸田市文化財調査報告V 戸田市教育委員会
1972

塩野 博 「一荒川下流域における墓制の変遷—戸田市南原古墳群について」
戸田市立郷土博物館研究紀要第1号 1986

塩野 博 『戸田市史 資料編1』 戸田市 1981



(1) 南原遺跡Ⅵの位置



(2) 調査区域全景



(1) 第1号住居跡（西から）



(2) 第2号住居跡（北から）



(1) 第2号住居跡土器出土状態(第8図-2・8・10・11)



(2) 第2号住居跡土器出土状態(第8図-9)



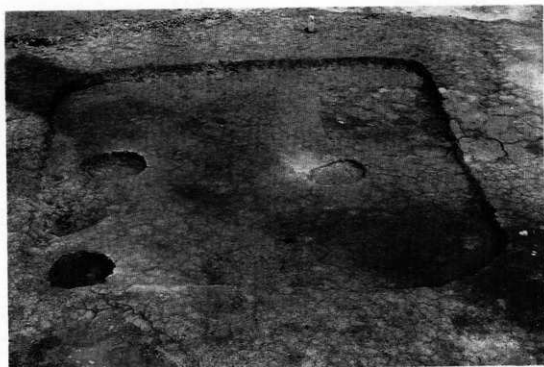
(3) 第2号住居跡土器出土状態



(4) 第3号住居跡土器出土状態(第11図-1)



(5) 第3号住居跡(西から)



(1) 第4号住居跡（南から）



(2) 第5号住居跡（北から）



(1) 第6号住居跡（北から）



(2) 第7・8号住居跡（西から）



(1) 第1号方形周溝墓(上空から)



(2) 第1号方形周溝墓土層断面



(1) 第1号円形周溝墓（上空から）



(2) 第1号円形周溝墓東側



(3) 第1号円形周溝墓南側



(4) 第1号円形周溝墓土器出土状態（第25図-1）



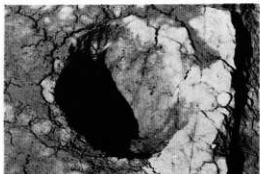
(5) 第1号円形周溝墓土器出土状態（第25図-2）



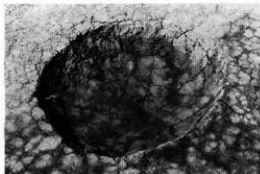
(1) 第1号溝 (南から)



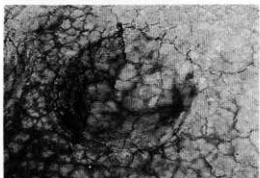
(2) 第1・2号堀 (南から)



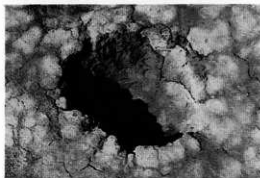
(1) 第1号ビット



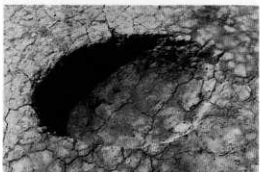
(2) 第2号ビット



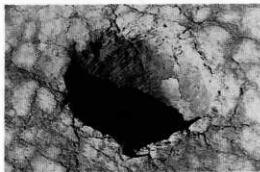
(3) 第3号ビット



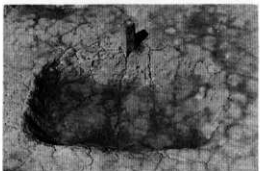
(4) 第4号ビット



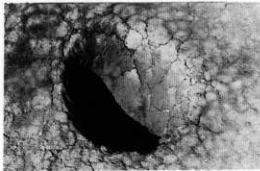
(5) 第6号ビット



(6) 第7号ビット



(7) 第8号ビット



(8) 第9号ビット



(1) 第2号住居跡出土遺物(第8図-1)



(2) 第2号住居跡出土遺物(第8図-6)



(3) 第2号住居跡出土遺物(第8図-7)



(4) 第2号住居跡出土遺物(第8図-8)



(5) 第2号住居跡出土遺物(第8図-9)



(6) 第2号住居跡出土遺物(第8図-11)



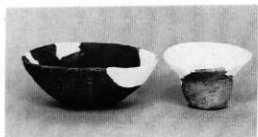
(1) 第3号住居跡出土遺物 (第11図-1)



(2) 第5号住居跡出土遺物 (第13図-8)



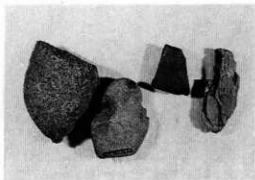
(3) 第5号住居跡出土遺物 (第13図-9)



(4) 第8号住居跡出土遺物 (第20図-5・4)



(5) 出土した土甕 (左から第13図-10、第25図-9)



(6) 出土した石器 (左から第11図-6、第28図-4、第11図-5、第13図-11)



(7) 第1号方形周溝墓出土遺物 (第22図-1)



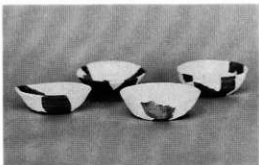
(1) 第1号円形周溝墓出土遺物 (第25図-1)



(2) 第1号円形周溝墓出土遺物 (第25図-2)



(3) 第1号円形周溝墓出土遺物 (第25図-10~12)



(4) 第1号円形周溝墓出土遺物 (第25図-13~16)



(5) グリッド出土の遺物 (第30図-1)



(6) グリッド出土の遺物 (第30図-14)

報 告 書 抄 録

フリガナ	ミナミハライセキ							
書 名	南原遺跡Ⅵ (第6次)							
副書名						巻次		
シリーズ	戸田市遺跡調査会報告書					巻次	第5集	
編著者	小島 清一							
編集機関	戸田市遺跡調査会							
所在地	〒335 戸田市上戸田1-18-1			TEL 048-441-1800				
発行日	1996 (平成8年) 3月15日							
フリガナ	フリガナ	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡	(' ')	(' ')		(㎡)	
ミナハラ 南原遺跡 (第6次)	トダミナミチュウ 戸田市南町 5番22号	11224	002	35°48'02"	139°40'31"	平成4年 6月24日 ? 平成4年 8月24日	2906.74	倉庫建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
南原遺跡 (第6次)	集落	弥生～古墳 時代 古墳時代 中世 時代不祥	住居跡 8軒 方形周溝墓 1基 円形周溝墓 1基 溝 1本 堀 2本 ピット 10	土器・石器 土器・石器 土器 陶器 陶器				

南原遺跡Ⅴ

埼玉県戸田市遺跡調査会報告書 第5集

発行日 平成8年3月15日

発行 戸田市遺跡調査会
戸田市上戸田1-18-1
戸田市教育委員会内

印刷 カミヤ印刷
浦和市道場3-14-4